慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカにおける日本文化
Sub Title	Japanese Culture in the United States
Author	寺澤, 行忠(Tarazawa, Yukitada)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Language, culture and communication). No.38 (2007. 3) ,p.1- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20070331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカにおける日本文化

寺　澤　行　忠

はじめに

2005年度に慶應義塾より在外研究の機会を与えられ，「海外における日本文化受容の研究」というテーマで，アメリカを初めとする幾つかの国々で，調査研究に従事することが出来た。本稿は，その研究成果の一部である。

時間的，経済的，期間的（大学は１年の約半分が休みである）その他さまざまな制約の中で，また日本でも運転免許を持たぬため，広大なアメリカで移動に車が使えなかったり，パソコン技術が未熟なために，パソコンを持ち歩きながら，連絡をとる手段として使えなかったりする条件の中で行った仕事であり，不備が多いことは充分承知しているが，この段階で，今までに調査し得たことを纏めておくことにした。

さまざまな制約や条件の中で，当然訪問すべくして叶わなかった所も多かった。記述も，幸運にもお目にかかることが出来た方々を中心とせざるを得なかった。失礼を深くお詫び申し上げる。

お気付きの点など，ご教示賜ることが出来れば幸いである。

実に多くの方々に，筆舌に尽せぬご親切を忝くした。改めて心より感謝申し上げたい。

なお，文中では原則として故人，また現存者でも作家や著訳者については，敬称を省略した。肩書などは，面会当時のものである。

1　大学における日本学

アメリカにおける日本学の歴史を辿る上で，セルゲイ・エリセイエフ，エドウィン・O・ライシャワー，角田柳作などの名を逸することは出来ない。

ロシアの大富豪の家に生れたセルゲイ・エリセーエフ（Sergei G. Eliseev）［1889–1975］は，ベルリン大学留学中に新村出に会い，日本留学を決意する。東京帝国大学国文科に学び，夏目漱石や小宮豊隆らと親交を結んだ。サンクトペテルブルグ大学で日本語教師となったが，ロシア革命に遭遇し，フィンランドに亡命する。その後，フランスに渡りソルボンヌ大学に職を得て，日本の作家の作品を翻訳し，日本文学を西洋に精力的に紹介した。1932 年にアメリカに渡り，ハーバード大学で日本学の講座を担当する。エドウィン・O・ライシャワーは彼の門下生の一人である。

エドウィン・O・ライシャワー（Edwin O. Reischauer）［1910–1990］は，宣教師で東京女子大の創設にも参画した父を持つ。東京で生れ，高校時代まで日本で過した。オハイオ州オバーリン大学に入学。その 4 年後，ハーバード大学大学院に進む。ハーバード大学はエリセイエフを迎え，日本研究がようやく開始された時期である。パリに 2 年留学した後，東大・京大に学ぶ。研究テーマは，円仁の『入唐求法巡礼行記』。これによって博士号を取得，ハーバード大学の講師に就任する。安保騒動直後の 1961 年，駐日アメリカ大使として，日本に赴任。在任中暴漢に刺されるという不運に見舞われたが，こうしたことが両国の関係を損ねることがないよう繰り返し強調した。66 年にハーバード大学に復帰する。中国・朝鮮・日本の広いフィールドを研究領域とし，日本人が自虐と自尊の両端を往来する傾向があることを指摘，国際人としての自覚を促した。

角田柳作［1878–1964］は，東京専門学校卒業後，仏教伝道のためハワイに渡る。のちアメリカ本土に移住し，コロンビア大学で教育哲学のジョン・デューイ（John Dewey）などに学び，日本文化を知る必要を自覚する。いったん日本に戻って寄付を募り，日本図書を大量に購入してコロンビア大学に寄贈する。これをもとにコロンビア大学は，1928 年に日本文化研究所を開設し，角田を講師に迎える。ここにコロンビア大学における日本学が始まった。彼は，ドナルド・キーン氏，歴史学者ハーバート・ノーマンをはじめ，多くの人材を育成した。角田に関しては，ドナルド・キーン氏の著作に詳しい。

1973 年，日本政府はアメリカにおける大学の日本研究を支援するために，国際交流基金を通じ，総額 1,000 万ドルを提供した。これは日本研究プログラムを持つ 10 の大学に配分された。田中角栄首相の時代であったから，いわゆるタナカ・テンと呼ばれるものである。これによって，アメリカにおける日本研究は，大きく進展することになった。

なお，アメリカにおける日本文化については，アメリカ在住のジェイムス・R・モリタ氏が，『アメリカの中の日本』（大学教育出版，2003）で，日本学も含め，アメリカの内側から見た日本文化全般をとり上げて考察しており，有益である。

カリフォルニア大学バークレイ校（University of California, Berkeley）

サンフランシスコ郊外バークレイにある，全部で 9 キャンパスから成るカリフォルニア大学群の一つ。バークレイにおける日本研究は，全米で 1, 2 番目に古い。学生の約半数は，アジア系である。

東アジア研究所日本研究センター（Center for Japanese Studies）には，East Asian Languages and Cultures をはじめ，さまざまな学部の教員，17 名が所属する。

センター長，アンドルー・バッシャイ（Andrew E. Barshay）教授は，元東大客員教授，東京女子大でも教鞭をとった。近代日本思想史，経済史が専門。アカデミックの日本像と一般の人々の関心はかけ離れており，一般の人々の日本像の誤りをどのように正すかが問題だと語る。最近の論文では，“What is Japan to Us ?”というタイトルで日本を論じる。

マック・ホートン（H. Mack Horton）教授は，East Asian Languages and Cultures の学部長。かつて東海大学に留学し，金子金次郎教授の指導を受けた。古典日本詩歌，日記文学，連歌，万葉集などを専門とする。

アラン・タンスマン（Alan Tansman）教授は，近代日本文学が専門。明治から昭和 30 年代までを扱う。かつて慶大国際センターでも教えた経験がある。

スーザン・マティソフ（Susan Matisoff）教授は，古典日本文学が専門。かつて京大・阪大に留学。中世文学，能，古浄瑠璃，説教節，御伽草子，語り物，伝説の歴史などに関心があり，“The Legend of SEMIMARU”（Columbia University Press, 1978）という著書がある。

羽生淳子準教授は，慶大出身，文化人類学，東洋考古学が専門。アメリカでは，考古学は，人類学の中に含めて扱われる。2005 年度の履修生のうち，11 人を青森の三内丸山古墳に連れて行ったという。近著に“Ancient Jomon of Japan”（Cambridge University Press, 2004）がある。

スティーブン・ヴォーゲル（Steven K. Vogel）準教授は，比較政治学，比較国際政治経済学を専門とする。『新・日本の時代――結実した穏やかな経済革命』（日本経済新聞社，2006.5）の著書がある。

長谷川葉子準教授は，日本言語学が専門。アメリカ人ほど外国語を勉強しない国民はいないが，一方で自分たちが外国語を知らないことに恐怖心ももっているという。

Miwako Tomizuka 講師や Noriko Komatsu-Wallace 講師、Chika Shibahara 講師は，日本語学が専門である。

スタンフォード大学（Stanford University）

東アジア研究センター（Center for East Asian Studies）には，60 人余りのスタッフが所属するが，そのうち日本学担当者は，約 20 人である。

ピーター・デュース（Peter Duus）名誉教授は，日本歴史殊に日本帝国主義，植民地主義が専門。氏によれば，アメリカにおける日本のイメージは，第一にアニメ，第二に漫画，第三に柔道や空手であり，Ｊポップ・大衆文化に対する関心が強いという。

別府春海名誉教授は，ビジネス人類学，文化ナショナリズムなどが専門。日系人の歴史などについても詳しい。

スティーブン・カーター（Steven D. Carter）教授は，日本文学ことに日本詩歌，随筆，紀行文学などが専門。スタンフォード大学では，学部学生が約 6,000 人，大学院生がそれと同数くらいいるが，日本文学を専攻する学生は少ないという。演習では，日本の時代小説を多くとりあげている。“Traditional Japanese Poetry”（Sanford University Press, 1991）という著書がある。

東アジア研究センターの所属ではないが，ステファン・サノ（Stephen M. Sano）音楽学部準教授は，ノースアメリカ，日本，カナダにおける太鼓の歴史を教えている。アメリカでは，ワイン樽を用いて太鼓を作っているという。

なお，京都には，「スタンフォード日本センター」があり，17 年間で 700 人以上の学生を教育してきた。1 年間の日本研究プログラムであり，2 年次までアメリカで勉強し，3 年次に日本へ来る。これは，1989 年に，Kyoto Center for Japanese Studies（KCJS）として改組され，全米の 13 大学，すなわちボストン，ブラウン，コロンビア，コーネル，シカゴ，エモリー，ハーバード，ミシガン，ペンシルヴァニア，プリンストン，スタンフォード，ワシントン，セント・ルイス，イエールの各大学が参加する組織体となった。さらに 2006 年には，「京都アメリカ大学連合」Kyoto Consortium for Japanese Studies（KCJS）として再改組，ヴァージニア大学も参加した。運営の中心はスタンフォード大学である。また，同じ京都の同志社大学内には，「スタンフォード技術革新センター」（Stanford Center for Techology and Innovation）があり，留学生が日本の産業技術，ビジネス，政治経済について学び，日本の企業で研修するプログラムを実施している。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles, 略称UCLA）

UCLA における日本学担当者は約 20 名であり，その多くが東アジア研究所（Asia

Institute）や日本研究センター（Center for Japanese Studies）に所属する。

Center for Japanese Studies は，“Paul I. and Hisako Terasaki”の名を冠する。UCLA外科，ポール・テラサキ（Paul Terasaki）名誉教授夫妻が，UCLA の Japanese Studies を支援するために 500 万ドルを寄贈したことによるのである。

ヘルベルト・プルチョウ（Herbert Plutschow）名誉教授は，現在，城西国際大学の客員教授。また，裏千家ロサンゼルス協会会長。『外国人が見た十九世紀の函館』（武蔵野書院，2002. 2），『江戸の旅日記――「徳川啓蒙期」の博物学者たち――』（集英社新書，2005. 8）など，多数の日本語による著書がある。

ミヒャエル・マルラ（Michael F. Marra）教授は，日本文学，近代日本美学，日本芸術論などを専門とする。近年は，会津八一研究にも力を入れている。2006 年春には，“The Making of an Ancient Capital: Nara”と題する，平城遷都 1300 年を記念した，International Conference を主催し，奈良県より「まほろば大使」に任命されている。アジア言語文化学部は，UCLA では英語学部に次ぐ大きな学部で，ヨーロッパ関係学部より規模は大きいという。

ドナルド・マッカラム（Donald F. McCallum）教授は美術史が専門。かつて京大に留学。仏教美術，ことに飛鳥・白鳳時代と現代に関心があるという。著書に“Zenkoji and Its Icon: A Study in Medieval Japanese Religious Art”（Princeton University Press，1994）がある。アメリカにおける仏教美術の専門家は，ほとんどが氏の弟子であり，日本美術史研究は，中国美術史研究に比べると，従来かなり遅れていたが，近ごろはほぼ同じレベルになってきたとのことである。

オームス・ヘルマン（Herman Ooms）教授は，歴史学が専門で，徳川時代の思想史，法の歴史，社会史，奈良時代の政治のシンボリズム，神道，仏教，陰陽道などを研究している。かつて東大に数年間留学，慶大教授であった宗教学者・宮家準氏とは同期生だという。著書に『宗教研究とイデオロギー分析』（ぺりかん社，1996. 7），『徳川イデオロギー』（ぺりかん社，1990. 10）など。最近，Bowring 著“Japanese Religious Tradition 650 –1590”（Cambridge University Press, 2005）という，非常に優れた日本宗教の歴史書が出た由である。

マリコ・タマノイ（Mariko Tamanoi）準教授は，歴史人類学が専門。かつてスタンフォード大学で，別府春海教授のもとで学んだ。今，1920 年から 30 年代の日本と中国の関係を，聞取り調査によって研究している。

2005 年に UCLA に研究滞在されていたトーマス・ライマー（J. Thomas Rimer）ピッ

ツバーグ大学名誉教授は，コロンビア大学で博士号を取得。米国議会図書館アジア部長，ワシントン大学中国・日本学部長，ピッツバーグ大学東アジア言語・文学部長などを歴任したアメリカを代表する日本研究者の一人。“A READER'S GUIDE TO JAPANESE LITERATURE”（『日本文学案内』，講談社インターナショナル，1991）は，日本文学のテキストとして，アメリカで広く使われている。

南カリフォルニア大学（University of Southern California, 略称USC）

東アジア研究センター（East Asian Studies Center）に所属するメンバーのうち，日本学研究者は，約 13 名である。

ジョーン・ピジョー（Joan R. Piggott）教授は，スタンフォード大学大学院を終えてからコーネル大で十数年勤めたあと，3 ～ 4 年前に USC に移った。氏は，日本図書をいま精力的に購入しており，ここ 2 年間で約 1 万冊を購入して，東アジア図書館の日本図書は 2 万 5 千冊になった。NHK のアーカイブ資料などをもっと使いたいし，学生に見せたいが，版権の問題が大きなネックになっている。NHK のフィルム・ライブラリーをもっと手軽に使えるようになれば，たいへん有難いと語る。

マサコ・タマナハ（Masako Tamanaha）講師は日本語担当，ここではヨーロッパ語に次いで，日本語の学生の履修者が多いという。南山大学，早稲田大学，東京国際大学と交換プログラムを実施している。

ペンシルヴァニア大学（University of Pennsylvania）

東アジア研究センター（Center for East Asian Studies）には，約 15 名の日本研究者が所属する。

キャメロン・ハースト（G. Cameron Hurst III）教授はセンター長。日本および韓国研究が専門である。かつて慶大で学んだ。

フランク・チャンス（Frank L. Chance）教授は，日本・韓国・中国の美術史，仏教美術や陶芸史が専門。京大などに通算 8 年留学，裏千家の茶道も数年修行した。

リンダ・チャンス（Linda H. Chance）準教授は，徒然草の受容史など，中世文学が専門。ウィリアム・ラフルーア教授の門下生。早大・成城大などに 7 年半留学した。「日本における戦争と文学――平家物語の何々」という具合に，講義タイトルに気を配ったり，源氏物語では，学生に人気のある漫画から入ったり，と工夫を凝らしている。

ウィリアム・ラフルーア（William R. LaFleur）教授は，かつて京大に留学。西行，和辻

哲郎，日本の近現代哲学，生命倫理，脳死や臓器移植の問題を専門とする。博士論文は西行研究で，“Awesome Nightfall THE LIFE, TIMES, AND POETRY OF SAIGYO”（Wisdom Publication, Boston, 2003）の著書がある。夫人も茶道師範であり，高校で日本語を教えている。

Language Coordinator のシェリー木村博子（Hiroko Kimura Sherry）Senior Lecturer は，日本語教育担当。ペンシルヴァニア大における日本語履修者は，近年 200 人前後で，この数で安定してきているという。同大学には，国際ビジネスマンを育てる目的で，4 年間で 2 つの学位をとらせる，ハンツマン・プログラム（Huntsman Program）と呼ばれるものがある。定員にかかわらず，よい学生がいなければ入れない。これには 8 つの外国語が用意されており，現在 4 人が日本語を学んでいる。3 年次に 1 年間，一橋大学に留学することになっている。

Ayako Kano 準教授は，日本演劇，日本文学，日本映画，ジェンダー論などが専門。「日本の演劇」が博士論文。慶大英文科出身。“ACTING LIKE A WOMAN IN MORDERN JAPAN”（PALGRAVE, New York, 2001）という著書がある。

プリンストン大学（Princeton University）

東アジア研究学部（Department of East Asian Studies）所属の日本学スタッフは約 17 名。中国研究スタッフは約 22 名だから，それよりやや少ない。

学部学生約 6,000 人，大学院生 1,000 人弱。全寮制で全人教育を目指し，研究と教育に五分五分の力を注いでいる。日本学専攻のドクターコースの学生は，15 名。石川県金沢市に「Princeton In Ishikawa」という施設を十数年前から持っていて，ここにアメリカから学生を送り，2 か月から 1 年間，日本語や日本文化の研修を行っている。年によって違うが，2005 年度はアメリカからの学生 45 人のうち，3 分の 1 はプリンストン大生であった。

プリンストンには日本人学生は比較的少なく，約 20 人程度だという。

ダヴィド・ハウエル（David L. Howell）教授は，東アジア研究学部長。日本近世史，江戸時代から明治初期ごろまでを専門とする。北大，国際日本文化研究センターなどに留学。“CAPITARISM FROM WITHIN: ECONOMY, SOCIETY, AND THE STATE IN A JAPANESE FISHERY”（University of California Press, 1995），“GEOGRAPHIES OF IDENTITY IN NINETEENTH-CENTURY JAPAN”（University of California Press, 2005）などの著書がある。

マルティン・コルカット（Martin C. Collcutt）教授は，中世文化史が専門で，中世の日本仏教，禅宗の社会的側面，また最近は岩倉使節団などについても研究している。“FIVE

MOUNTAINS”（Harvard University Press, 1981）などの著書がある。

牧野成一教授は，認知言語学が専門。最近は文化の分析，特に異文化論ではなく同文化論という，人間に普遍的な文化論を研究している。アメリカにおける日本語教育の指導的な立場にある。

Keiko Kuriyama 講師は，日本語教育担当。日本語コースは，1 年から 6 年まであるが，夏休みに 1 年分を勉強することができるので，実際には 4 年間で 6 年分を履修することが可能であり，また文系学生より，理系学生の日本語学習の定着率がよいという。

Tomoko Shibata 講師も，日本語教育担当。プリンストン大学では，日本語教育担当者は，1 ～ 3 年毎に審査を受けなければならないとのことである。

コロンビア大学（Columbia University）

ドナルド・キーン日本文化センター（Donald Keene Center of Japanese Culture）は，日本文学研究に多大な貢献のあった，ドナルド・キーン名誉教授を記念して，1986 年に設立されたものである。日本研究の発展と，アメリカにおける日本及び日本文化についての理解を深めることなどを目的としている。活動内容は，講演，シンポジウムの運営，翻訳賞，奨学基金，交換研究員に関するプログラムの運営など，多岐に及んでいる。これまでに，大岡信，大江健三郎，武満徹，観世栄夫，司馬遼太郎などの各氏が招かれている。

また，裏千家財団より贈られた寄付金 50 万ドルを基に，千宗室日本文化講演会プログラムが設立され，毎年講演会が開かれている。

ドナルド・キーン名誉教授は，1922 年生れ，コロンビア大学で博士号を取得。かつて京大に留学。日本の文化功労者，日本学士院名誉会員。国際交流基金賞をはじめ，多くの賞を受賞している。日本語の著作が 30 点，英語による著作が約 25 点ほどある。1986 年には，日本文化研究者としては初めて，全米芸術アカデミーに選出された。日本文学は，今やローカル文学から世界文学になったと言ってよいが，そのようになる上で，まず最初に指を折らなければならない功労者が，多数の研究書と翻訳の業績を持つキーン氏であったと言っても，過言ではあるまい。氏は，以前はアメリカで海外といえばヨーロッパを指したが，今は教養あるアメリカ人にとっては，日本の方が魅力的である。また日本の工芸品は世界一で，例えばアメリカの陶器を作る人で，日本の影響を受けていない人はいないと語る。

エドワード・サイデンステッカー（Edward G. Seidensticker）名誉教授は，ハーバード大学で日本文学を専攻。東大に留学し，のちコロンビア大学の教授となる。多数の翻訳や

研究書により，日本文学を世界に紹介し，ドナルド・キーン氏と共に，日本文学の国際的評価を高めることに貢献した。源氏物語の翻訳“The Tale of Genji”（Secker and Warburg, 1976）は特に名高い。

コロンビア大学にはまた，「中世日本研究所」がある。京都の大歓喜寺内にも同じ名称の姉妹組織がある。この研究所は，1968 年にペンシルベニア大学で設立され，1984 年にコロンビア大学に移されたものである。1978 年には，同研究所の主催で，奈良絵本国際会議がロンドンで開催されている。2003 年には，創立 35 周年記念行事がニューヨークと京都で行われた。所長は，バーバラ・ルーシュ（Barbara Ruch）名誉教授。氏が，日本中世に目を向けるきっかけになったのは，13 世紀に作られた，無外如大禅尼の実物大頂相彫刻と出会ったことにある。それもあって，同研究所は，日本の宗教史における女性の役割を研究の大きな柱に据え，近年は各方面から寄付金を募り，尼僧寺院の保存修復運動に積極的に取り組んでいる。それは，日本に対する恩返しのつもりだという。また，最近は雅楽に魅せられ，コロンビア大学に雅楽の講義を開設すべく，まず雅楽の楽器を購入するなど，熱心に活動をしている。

東アジア言語・文化学部（Department of East Asian Languages and Cultures）には，約 14 名の日本学研究者が所属する。

グレゴリー・プルーグフェルダー（Gregory M. Pflugfelder）準教授は，ドナルド・キーン日本文化センターの所長でもある。日本文化に目が開かれたのは，1977 年にハーバード大学で，ライシャワー氏の引退の前に，講義を聞いたことによる。1981 年から 88 年にかけて，早大に留学。1980 年代には，日本経済は世界一になるのではないか，という期待から日本を学ぶ傾向が強かったが，今の学生は，日本文化が面白いから学びたいのだという。それも，エキゾチックな日本ということではなく，自分の文化の一部になっているけれども，よく知らないから学ぶ，という態度である。

ハルオ・シラネ教授は，新潮社基金による Shincho Professor of Japanese Literature and Culture で，幅広い分野の日本文学を専門とする。著書に『芭蕉の風景　文化の記憶』（衣笠正晃訳，角川書店，2001），“Early modern Japanese literature; an anthology, 1600–1900”（Columbia University Press, 2002）などがある。氏によると，日本文学専攻の大学院生は，毎年何百人かの応募者のうち 3 ～ 4 人が採用され，大学はこれらの学生に対し，4 万ドル近い奨学金を出す。すなわち，助教授 1 人に対して払う給料とほぼ同じ額の資金を使って，研究者を養成するという。

鈴木登美準教授は，日本近代文学，ことに 19 世紀から 20 世紀文学を専門とする。東大

仏文科出身。英語を母国語とするものにとっては，ロシア語，日本語，韓国語は最も難しく，日本語は4年間懸命にやっても，やっと新聞が読めるようになる程度だと語る。著書に『語られた自己』（岩波書店，2000. 1）など。

フミコ・ナジキアン（Fumiko Nazikian）Senior Lecturer は，日本語プログラムのディレクター。コロンビア大学では，日本語教育を文語から始めるべきだとする信念の人もおり，文語クラスもある。コロンビア大学における日本語学習者の学習動機は，日本文化に対する興味と職業上の関心が，半分ずつであるという。

デヴィッド・ルーリー（David Lurie）助教授は，日本古代文学・文化史が専門。かつて東大に留学。万葉集の人麻呂歌集の略体，非略体の論をめぐって，“On the 1 Inscription of the Hitomaro Poetry Collection: Between Literary History and the History of Writing”（『萬葉集研究』第26集所収，塙書房，2004. 4）をはじめ，幾つかの論文がある。

マイケル・コモ（Michael I. Como）宗教学部助教授は，日本の飛鳥・奈良時代の宗教が専門。神道の寄付講座のチェアシップである。平泉の毛越寺に2年滞在，また京大に4年留学した。「日本の宗教」の講義には約70人の学生が出席，熱心に聴講している。今の学生は，アニメやマンガを通して，日本の宗教に関心を持つという。また，アメリカの黒人に，創価学会や日蓮宗が受け入れられている由である。

ロバート・インマーマン（Robert M. Immerman）氏は，Weatherhead East Asian Institute の Senior Research Associate。かつて日本のアメリカ大使館に勤務した。これからのアジアは，中国を相手に，日本が第三世界のモデルになり得るかどうかが最大の焦点だという。

マックス・ムアマン（D. Max Moerman）バーナード校アジア文化学部助教授は，日本宗教が専門。近著に熊野巡礼と熊野信仰に関する研究，“Localizing Paradise: Kumano Pilgrimage and the Religious Landscape of Premodern Japan”（Harvard University Asia Center, 2005）がある。

ヴィーブケ・デーネーケ（Wiebke Denecke, 魏樸和）バーナード校助教授は，奈良・平安日本と中国の文化交流，中国文化史，漢文学などが専門である。

イェール大学（Yale University）

東アジア言語・文学部（Department of East Asian Languages and Literatures）には，約10名の日本学研究者が所属する。

ジョン・トリート（John W. Treat）教授は，学部長で，近代日本文学が専門。かつて慶

大に留学し，井伏鱒二を研究する。アメリカでは，70 年代には，日本文化といえば，能・狂言・歌舞伎・文楽といった中世の代表的文化だったが，今はアニメ・マンガ・村上春樹の 3 つだという。アニメや漫画は表面的な文化であり，村上春樹の作中人物は，アメリカナイズされた生活をしたり，アメリカ的な趣味を持っており，純日本的ではない。それでも，今のアメリカの学生は，ヨーロッパよりも非ヨーロッパに関心が向いており，中国や日本に行く学生が断然増えた。文化に対する興味が変わってきたのだと語る。著書に，“WRITING GROUND ZERO—Japanese Literature and the Atomic Bomb”（The University of Chicago Press, 1995），“Contemporary Japan and Popular Culture”（University of Hawai ‘i Press, 1996）などがある。

エドワード・ケイメンズ（Edward Kamens）教授は，前近代日本文学が専門。著書に“Utamakura, allusion, and intertextuality in traditional Japanese poetry”（Yale University Press, 1997）など。

広江浩一シニアレクターは，Japanese Language Program のディレクターである。イェールには，ライト（Light）奨学金という制度があり，これは日本語，中国語，韓国語など，アジアの言語を勉強する学生に対して支給される。毎年 100 人が受給することが出来，恵まれている。他にも横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターや京都アメリカ大学連合に留学する学生も多く，イェールは，アイビー諸大学の中でも，日本に留学出来るチャンスの多い大学と言える。日本に留学した学生は，強い印象を受けて帰るという。

丸山美子シニアレクターも日本語教育担当である。

ハーバード大学（Harvard University）

ライシャワー日本研究所（The Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies）には，約 31 名の日本学研究者が所属する。

エドウイン・クランストン（Edwin A. Cranston）教授は，日本古典文学，特に詩歌を専門とする。1966 年にスタンフォード大学で ph. D. を取得。博士論文は，加筆修正を経て，Harvard-Yenching Institute Monograph Series の一冊として，“The Izumi Shikibi Diary: A Romance of the Heian Court”（Harvard University Press, 1969）というタイトルで出版された。国際日本文化研究センターなどにも留学。“A Waka Anthology, Volume one: The Gem Glistening Cup”（Stanford University Press, 1993）は，日米友好委員会賞を受賞した。2002 年には第 2 巻が刊行されている。

ハワード・S・ヒベット（Howard S. Hibbett）教授は，ハーバード大学の出身で，江戸時代および近代日本文学が専門である。特に江戸後期の戯作文学や滑稽本に関心が深い。東大・京大に留学。著書に「日本文学と笑い研究会」との共編で『笑いと創造（第1集～第4集）』（勉誠出版，1998～2006），英訳に谷崎潤一郎『春琴抄』などがある。また1967年に板坂元との共編で出版した“Modern Japanese: Basic Reader”（Harvard University Press）は，この方面の古典的名著として版を重ねている。

阿部龍一教授は，仏教の言語哲学，仏教と文学，日本密教史，神道と仏教の交流，仏教とジェンダーなどを研究の中心課題としている。慶大出身。前任校コロンビア大学では，宗教学部長を務めた。仏教の中でも，アメリカでいま一番ポピュラーなのはチベット仏教で，チベットに関心を持つ人が多いという。大学院では，「日本宗教文化」「東アジアの宗教的なテキスト」などを講じる。著書に“Great Fool—Zen Master Ryokan”（University of Hawaii Press, 1996），“The Weaving of Mantra—Kukai and the Construction of Esoteric Buddhist Discourse”（Columbia University Press, 1999）などがある。

入江昭教授は，アメリカ外交史および日米関係に関する諸問題を専門とする。東京で高校を卒業し，ハーバード大学でアメリカ及び東アジア史の博士号。1991年にチャールズ・ワレン・チェアシップ基金アメリカ史教授となる。日本語図書の英語への翻訳がなかなか進まないことに関し，例えばある国際ライブラリー基金では，1年に4冊分の翻訳補助をするが，こうした事業全体の傾向としてはいかにも少ないのではないかと語る。著書に『日米関係五十年——変わるアメリカ・変わらぬアメリカ』（岩波書店，1991），“Cultural Internationalism and World Order”（Johns Hopkins University Press, 1997），『権力政治を超えて——文化国際主義と世界秩序』（岩波書店，1998）などがある。

ウエスリー・ヤコブセン（Wesley M. Jacobsen）教授は，日本語プログラムのディレクター。日本で生れ，少年時代のほとんどを日本で過ごした。日本語文法において，時制，叙法性，他動性といった概念がいかに相互に作用するか，また，英語と日本語では，それらの概念が果たす文法上の役割に，どのような類似点や相違点があるかについて研究している。ハーバードでは，伝統的に中国研究が中心であった。1994年頃から日本語履修者が減りはじめ，日本研究，特に文学をやる者は数が減少しているという。

ヘレン・ハーデーカー（Helen Hardacre）教授は，日本宗教が専門。日本に対する関心は，ベトナム戦争時の学生時代に始まる。この戦争を機に，アメリカの教育が，アジア各国の歴史や文化にほとんど注意を払っていないことに気付いた。そして，ベトナム戦争中に日本の宗教を勉強することは，自国を批判的に考察する初めての機会となったという。

京大に留学したのをはじめ，日本には通算 9 年滞在し，現代の神道や仏教の宗教組織，在日韓国人の宗教生活など，広範にわたるフィールド・ワークを行ってきた。国家神道や現代における中絶儀式化についても研究している。

アンドルー・D・ゴードン（Andrew D. Gordon）教授は，歴史学部長，元ライシャワー日本研究所長。近著『日本の 200 年：徳川時代から現代まで　上・下』（森谷文昭訳，みすず書房，2006）（原著“A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present”, 2002）は，日本近現代の通史で，日本は決して特殊な国ではなく，日本の近代化の過程は，他の国々と共通する点が多いという立場で書かれている。

アジア文明言語学部（Department of East Asian Languages and Civilizations）には，約 10 名の日本学研究者が所属する。多くは，ライシャワー日本研究所のメンバーと重なる。

ミシガン大学（The University of Michigan）

アメリカ陸軍が，1942 年に日本語学校を設立して以来，ミシガン大学は，日本研究の一大拠点となった。

日本学研究所（Center for Japanese Studies）には，約 58 人の研究者が所属する。

エスペランザ・クリステンセン（Esperanza Ramirez-Christensen）教授は，前近代日本文学，特に詩歌，哲学，宗教，美学，批評と理論，ジェンダーの問題などを専門とする。ハーバード大学で博士号を取得，日本では東海大学の金子金次郎教授のもとで，心敬を学んだ。著書に“ Heart’s Flower: The Life and Poetry of Shinkei”（Stanford University Press, 1994）など。

殿村ひとみ歴史学部準教授は，前近代の日本史を専門とする。スタンフォード大学で Ph. D. を取得。また東大史料編纂所に留学した。日本語文献の英訳は重要なことであるが，現状は，多くの注釈をつけなければ，翻訳だけでは業績にならないから，なかなか翻訳が進まない。翻訳に対する日本政府の助成をもっと増やすべきだという。

岡まゆみ講師は，日本語教育担当。文化をいかに言語教育の中に取り入れていくかが課題で，そのようなテーマで，近く，シンポジウムを行う計画だという。

シカゴ大学（University of Chicago）

東アジア研究センター（Center for East Asian Studies）には，約 11 名の日本学研究者が所属する。

ノーマ・フィールド（Norma Field）教授は，近代日本文学が専門である。東京に生れ，

高校を出てから渡米。東大へ留学。プリンストン大学で博士号。アメリカには，日本語を勉強している大学院生が，アルバイト料を大学が払って，公立の小中高校で日本語を教える制度があり，なかなか良いという。著書に The Splendor of Longing in “The Tale of Genji”（Prinston University Press, 1987），『天皇の逝く国で』（みすず書房，1994，大島かおり訳），『祖母のくに』（みすず書房，2000，大島かおり訳）など。

ハンス・トムセン（Hans B. Thomsen）助教授は，日本美術史が専門。京都生れで，日本に 17 年住んだ。

Hiroyoshi Noto 上級講師は，日本語教育担当。早大卒。日本語プログラムのディレクターで，すでに 20 年以上の経験をもつベテランである。

ハワイ大学マノア校（University of Hawaii at Manoa）

日本研究センター（Center for Japanese Studies）には，約 50 名の研究者が所属する。

アレキサンダー・ヴォヴィン（Alexander Vovin）教授は，上代日本語が専門。万葉仮名と取組む。かつて京都の国際日本文化研究センターに留学。大学院生を対象とする上代日本語の講義には 4 人，草書や変体仮名を読む講義には 7 人の学生が参加する。万葉集の翻訳作業を進める。

聖田京子教授は，教育学が専門。慶大出身，ハワイ大学で，教育学の博士号を取得。アメリカの大学では，最近は中国語履修者の方が日本語履修者より多いが，ハワイ大学では，すべての外国語の中で，日本語を履修する者が最も多いという。また，ハワイと沖縄の密接な歴史的関係を踏まえて，沖縄の言語と文化のコースを始めた。

クック（峯岸）治子準教授は，社会言語学が専門。南カリフォルニア大学で言語学の博士号を取得。ジェット・プログラムで日本に行く学生もいるが，ジェット・プログラムには，その効果についての調査がないのは問題だとする。

ジョエル・コーン（Joel R. Cohn）準教授は，近代日本文学が専門。かつて慶大に 2 年，東京外国語大学に 2 年留学。ハーバード大学で博士号を取得。著書には，井伏鱒二，太宰治，井上ひさしなどをとりあげた “Studies in the Comic Spirit in Modern Japanese Fiction”（Harvard University Asia Center, 1998），また，夏目漱石『坊っちゃん』の翻訳 “Botchan—A Modern Classic”（Kodansha International, 2005）などがある。

ジョン・スゾスタク（John D. Szostak）助教授は，日本美術史が専門である。かつて京大に留学。もともと奈良・平安の仏像に興味があったが，今は近代美術史，それも京都中心で，京都の美術団体を調査している。日本美術史を履修する学生は約 200 人，その半分

は Japanese American，約 20 人は日本人である。ハワイで，アメリカ人の教授から日本美術史を学ぼうとするのは，要するに英語漬けになりたいのであろうと言う。

2　日本美術・工芸品

サンフランシスコ・アジア美術館（Asian Art Museum of San Francisco）

1966 年に，実業家で元 IOC 会長としても著名な，アベリー・ブランデージ（Avery Brundage）氏によって，サンフランシスコ市へ寄贈されたものである。アジアの美術品だけを保有する美術館としては，西洋諸国で最大規模で，全体で約 14,000 点の美術品を有する。中国コレクション 6,100 点以上，日本コレクションは約 3,700 点。6 か月間の展示が原則で，一度展示すると，5 年間は出さない。年間約 3,000 点が展示される。

所蔵品には，縄文後期の土偶，弥生時代後期の銅鐸，古墳時代の埴輪，奈良時代の梵天・帝釈天立像，平安時代の阿弥陀如来座像・聖観音立像，室町時代の信楽大壺，柿右衛門の壺や皿，室町時代後期の南蛮屏風などがある。ほとんどがアベリー・ブランデージ・コレクションである。館内に「霧中庵」という茶室があり，裏千家・表千家・武者小路千家など 5 流派で使っている。日本美術担当のヨーコ・ウッドソン（Yoko Woodson）氏によると，アジア美術館の観客は 40 ～ 60 代の白人，それも女性が多いという。

なお，本美術館収蔵日本美術品についての詳細な調査報告が，刊行されている（『海外所在日本美術品調査報告 5，サンフランシスコ・アジア美術館絵画・彫刻』東京国立文化財研究所編集発行，1995）。

ロサンゼルス・カウンティ美術館（Los Angeles County Museum of Art）

1911 年にロサンゼルス市内に歴史・科学・美術博物館として開館し，1961 年に美術館機能のみが独立して成立した美術館。日本美術品については，他の建物とは独立した「日本館」が設けられている。

シャロン・サダコ・タケダ（Sharon Sadako Takeda）染織部長は，染織・小袖などの専門家。かつて大阪外大，金沢美大に留学した。江戸時代の小袖展を企画展として行ったことがある。著書に“When Art Became Fashion: Kosode in Edo-Period Japan”（Weatherhill-Published, 1992）（Dale Carolyn Gluckman 氏との共著）がある。

ホリス・グダル（Hollis Goodall）日本美術部次長は，かつて京大に留学。この日本館のコンセプトは，絵画を自然光の中で見ること，また一つの作品を集中してみるため

に，たとえば軸ならば，余り軸同士を近づけないで展示していると語る。著書に“The Raymond and Frances Bushell Collection of Netsuke: A Legacy at the LACMA”（Art Media Resources, 2003）など。

展示品には，後期縄文時代の土偶，弥生時代の銅鐸，古墳時代の埴輪，鎌倉時代の壷，桃山時代の茶器，丸山応挙の屏風，与謝蕪村の屏風，谷文兆の風景画などがある。北斎・広重・伊東深水など近現代の版画も多い。

ワシントン・スミソニアン，フリーア美術館＆アーサー・M・サックラー美術館（Smithsonian Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery）

フリーア美術館は，1923年にデトロイトの実業家，チャールズ・ラング・フリーアによって設立された。1910年以前に集めたもので，条件をつけての寄贈であり，コレクションを巡回展に出すことは出来ない。最初のコレクションは，現在の半分以下であるが，浮世絵は，フリーアが寄贈する前に売ってしまい，現コレクションにはない。

アーサー・M・サックラー美術館は，アーサー・M・サックラーが寄贈した約1,000点のコレクションと400万ドルの寄付金によって，1987年に設立された。寄贈されたものは，ほとんどアジア諸国の作品である。その後の収蔵品は，購入したものも多少あるが，基本的には寄贈によっている。浮世絵の収集は，最近になってからである。

フリーア美術館とアーサー・M・サックラー美術館は，地下の展示通路で繋がっており，研究員の組織も共通である。

吉村玲子氏は図書館長。書籍も8万冊程度あるが，そのうち日本関係のものは，美術書を中心に1万冊余り。美術関係を中心とする江戸時代の版本も約250タイトルある。

ルイーズ・A・コート（Louise A. Cort）氏は，陶磁器関係のキュレーター。信楽焼にも詳しい。

フリーア美術館には，弥生時代の銅鐸，鎌倉時代の仁王像（木造），本阿弥光悦の茶碗，雪舟の水墨画屏風，尾形光琳の群鶴図屏風，与謝蕪村の風景画屏風，渡辺華山の佐藤一斎像などがある。

フィラデルフィア美術館（Philadelphia Museum of Art）

1875年にペンシルヴァニア美術館・工芸美術学校として組織されたものを出発点とし，すでに約130年の歴史を有する。日本美術品も多いが，それらの中には，フェノロサの娘ブレンダが寄贈したフェノロサ収集の日本美術品100点余りと，その長男夫妻が寄贈した

40 点余りが含まれる。狩野芳崖の「雪柳雉子図」「飛龍児戯図」，橋本雅邦の「毘沙門天図」「観音調停図」などの傑作もこの中にある。フェノロサは，1876 年，23 歳の時にフィラデルフィアで開かれた万国博覧会で，初めて多くの日本美術品に接しており，これが日本美術に目が開かれる大きなきっかけになったゆかりの地であった。これらの美術品の寄贈の経緯については，今井雅晴『アメリカにわたった仏教美術――フィラデルフィア美術館を中心に――」（自照社出版，1999）に詳しい。

日本美術品展示室の中央には，室町時代の奈良の勝福寺の建物が復元されており，堂内中央には阿弥陀仏（13 世紀後半，木造），両脇に阿弥陀仏（13 世紀後半，木造）と観音菩薩像（1600 年頃，木造）が安置されている。

また，日本美術品展示場の一角に，茶室「寸暇楽」が復元されている。

フェリス・フィッシャー（Felice Fischer）博士は，東洋美術部長のキュレイターである。

著書に“Japanese Design: A Survey Since 1950”（Philadelphia Museum of Art, 1995）（Kathryn B. Hiesinger 氏と共著）などがある。

棟方志功も 1959 年にフィラデルフィアを訪問し，その折，何枚かの肉筆画を描いた。そのうちの 5 点が，フィラデルフィア美術館東洋美術部に保存されている。また，写真・版画部には 38 点の版画・石版画が保存されているが，うち 7 点は，この滞在中の制作にかかるものである。

なお，本美術館収蔵日本美術品についての詳細な調査報告が，古文化財科学研究会より刊行されている（『海外所在日本美術品調査報告 3，フィラデルフィア美術館絵画・彫刻』東京国立文化財研究所編集，古文化財科学研究会発行，1993）。

ニューヨーク・メトロポリタン美術館（The Metropolitan Museum of Art）

1972 年に開館した世界有数の美術館で，300 万点余りの美術作品を所蔵する。日本コレクションに関しては，1929 年にハーベマンコレクションを，1975 年にパッカードコレクションを購入，これが中心である。毎年何点かを購入し，寄贈も受入れている。

武具や鎧の良いコレクションを持っている。足利尊氏の鎧などは，特に注目される。日本関係の特別展をすると，概して評判は良い。ゴッホ展には及ばないが，他の企画に比べると多くの観客が入り，織部展には 15 万人が訪れた。

本美術館には，縄文時代中期の土器，平安時代後期の不動明王立像，桃山時代の保元平治合戦図，桃山時代の銚子，鎌倉時代後期の鎧兜，江戸時代の小袖，喜多川歌麿の木版画「南国美人合」などが収蔵されている。

渡辺雅子氏は，東洋部主任研究員で美術史博士。日本が特別ということはなく，エキゾチックな趣味に陥らないよう配慮していると語る。土肥信一氏は，Conservator である。

なお，本美術館収蔵日本美術品についての詳細な調査報告が，古文化財科学研究会より刊行されている（『海外所在日本美術品調査報告 1，ニューヨーク・メトロポリタン美術館絵画・彫刻』東京国立文化財研究所編集，古文化財科学研究会発行，1991）。

ボストン美術館（Museum of Fine Arts, Boston）

ボストン美術館は 1870 年に設立され，約 50 万点の所蔵品を有する。日本との関係も深く，モース，フェノロサ，ビゲロー，岡倉天心などの名を忘れることは出来ない。

エドワード・シルベスター・モース（Edward Sylvester morse, 1838-1925）は，1877 年に動物学研究のために来日，79 年まで東京帝国大学で動物学を講じた。その間，大森貝塚を発見したことで知られるが，また陶磁器に興味を抱くようになり，約 5,000 点の作品を収集した。後年，これらのうち陶磁器はボストン美術館へ，それ以外の民俗資料などは，セーラムのピーボディー博物館に売却した。

アーネスト・フランシスコ・フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908）は，モースと同郷の知人であったが，モースの紹介で東京帝国大学教授として 1878 年に来日，政治学や哲学を講じた。モースの影響もあって日本美術に関心を持ち，日本美術研究と作品の収集に情熱を傾けた。岡倉天心と共に法隆寺夢殿を開扉させ，救世観音の存在を世に知らしめた。伝統的な日本美術の価値を，日本人に再認識せしめた功績は大きい。一方，13 世紀の作「平治物語絵巻」や尾形光琳「松島図屏風」など，1,000 点を越す作品を収集，これらはボストンの外科医に売却，のちその外科医からボストン美術館に寄贈された。1890 年には，日本美術品を中心に新設された東洋部の初代部長に就任している。

1910 年に第 2 代東洋部長に就任したのは，岡倉天心（1862-1913）である。フェノロサの感化で，日本美術の振興に尽力，東京美術学校の創立に参与したり，日本美術院を創設するなど，大きな足跡を残した。英文による著作“The Book of Tea”（邦訳『茶の本』，1906）は，日本文化の優秀性を説いて，欧米の知識層に多大な影響を与えた。ボストン美術館には，快慶の「弥勒菩薩像」など，天心のコレクションも含まれている。

ウィリアム・スタージス・ビゲロー（William Sturgis Bigelow, 1850-1926）は，もともと医者であったが，ボストンにおけるモースの日本に関する講義に触発されて，1882 年に来日した。日本の文化や伝統を深く愛し，富豪の家に生まれ生計を心配する必要がなかったこともあって，日本には前後 7 年間滞在した。豊かな財力を背景に，多くの日本美

術品を収集したが，1911 年に奈良時代の「法華堂根本曼荼羅」をはじめ，約 4,000 点の絵画と 3 万点以上の木版画がボストン美術館に寄贈された。この中には，700 点の肉筆浮世絵絵画が含まれている。これらは，注文によって描かれた，一点しかない特注品であるが，長く調査もされず放置されてきた。1996 年から日本人研究者による現地調査が行われ，江戸期を代表する絵師たちによる，世界に比類のないコレクションであることが確認された。2006 年には，その中から 80 点余りが日本に送られ，いわば 1 世紀ぶりの里帰り展として，江戸東京博物館で展観に供された。

また，スポルディング兄弟（W. S. Spaulding 1865–1937, J. T. Spaulding 1870–1948）が寄贈した大量の浮世絵版画コレクションは，遺言で館内の展示すら禁じられていたため，長く秘蔵されてきたが，最近の調査で，驚くほど鮮やかな色彩が保たれたものであることが明らかになり，注目されている。

1992 年に，名古屋に名古屋ボストン美術館が開設された。これはボストン美術館からテーマに沿って作品を借り受けて，展覧しているものである。

ジョウ・アール（Joe Earle）氏は，アジア・オセアニア・アフリカ美術部の正力松太郎記念部長。アン・ニシムラ・モース（Ann Nishimura Morse）氏は，日本美術課長。仏教画や仏像に詳しい。セーラ・E・トンプソン（Sarah E. Thompson）氏は，日本美術課浮世絵版画室長。本美術館には江戸時代の版本も約 8,000 冊あり，これらは今，ラキュール・サヴダース（Racuel Savuders）氏の手で調査中である。

「吉備大臣絵巻」「平治物語絵巻」をはじめ，ボストン美術館における日本美術品のコレクションは，全体で数万点に及ぶ。

『ボストン美術館東洋美術名品集』（ボストン美術館東洋部責任編集，日本放送出版協会，1991）は，本美術館が所蔵する，99 点の代表的名品の図録である。

他に次のような詳細な調査報告がある。

『ボストン美術館日本美術調査図録：第 1 次調査：仏画・仏像／仏具／袈裟／能面／水墨画／初期狩野派／琳派』（アン・ニシムラ・モース，辻惟雄編，講談社，1997）

『ボストン美術館日本美術調査図録：第 2 次調査：江戸時代狩野派／土佐・住吉・復古大和絵派／肉筆浮世絵／曾我蕭白・伊藤若沖／近代』（アン・ニシムラ・モース，辻惟雄編，講談社，2003）

ピーボディー・エセックス・ミュージアム（Peabody Essex Museum）

大森貝塚の発見で著名なエドワード・モース（Edward S. Morse）は，1877 年に来日，

日本各地を歩きまわり，約3万点に及ぶ民具を収集した。これが今，ボストン北郊セーラムのピーボディー・エセックス・ミュージアムに所蔵されている。この種のコレクションとしては，世界最大といってよい。

シカゴ美術館（The Art Institute of Chicago）

The Art Institute of Chicago は，美術館，美術学校，演劇学校などを含む総合研究施設である。1879 年に Chicago Academy of Fine Art として発足し，82 年に現名称に改称した。印象派を中心とする近代フランス絵画の名作を，多数有することで知られるが，日本美術のコレクションも，ボストン美術館に次ぐ規模をもつ。

1992 年に当時の三菱銀行が 1 億ドルを提供して，アジアセクションを改築した。入り口には，“The MITSUBISHI Bank Galleries Chinese, Japanese and Korea Art”という標識がある。版画が約 15,000 点あるが，このうち約 5,000 点は 20 世紀のもので，他は江戸時代の作品である。また絵入り版本が約 2,000 冊あり，現在整理中である。さらに 1920 ～ 30 年代に学芸員であった Gookin のコレクションが，約 300 冊ある。2006 年 9 月に訪問した折の展示室には，11 世紀の毘沙門天木像，12 世紀後半乃至 13 世紀の地蔵菩薩木像，鎌倉時代の不動明王木像，奈良時代の菩薩座像（木像），鎌倉時代の執金剛神木像，10 世紀の僧形八幡木像，鎌倉時代の如意輪観音木像，また百万塔陀羅尼や歌麿の版画数十点が展示されていた。展示室の一角には，すべて樫材で作られた，1992 年に安藤忠雄氏が設計した特別室があり，ここには鎌倉・室町・桃山期の壺や，現代作家の水差し，茶器などが展示されている。

ジャニス・キャッツ（Janice Katz）氏は，日本美術部門を担当する唯一の学芸員である。

ホノルル美術館（Honolulu Academy of Arts）

ホノルル美術館は，1927 年にチャールズ・M・クック（Charles M. Cooke）夫人の寄贈品約 4,000 点によって出発した総合美術館である。現在は総数 35,000 点以上，東洋と西洋の作品がほぼ半数ずつである。そのうち日本絵画のコレクションは 300 点以上ある。

また，9,000 点に及ぶ浮世絵版画のコレクションをもつが，そのうち 5,400 点は，アメリカの彫刻家，ジェームズ・A・ミッチェナー（James A. Michener）氏によって，1959 年から 1991 年にかけて寄贈されたものである。この 9,000 点という数は，アメリカではボストン美術館，シカゴ美術館に次いで多い。またこのミッチェナーコレクションは，日本以外では最大の歌川広重の作品を含んでいる。クック夫人は開館後も，多数の日本絵画

を収集しているが，その主な購入先は，京都の野村商会とニューヨークの山中商会であった。近年は，ロバート・ランゲ財団（Robert F. Lange Foundation）が，作品を寄贈したり，日本絵画や浮世絵修復計画に，資金を提供したりしている。

本美術館の主な収蔵品には，鎌倉時代の「弘法大師行状絵巻」「当麻曼荼羅」「阿弥陀来迎図」，桃山時代初期の狩野宗秀筆「洛中洛外図扇面」，室町時代の「山水画」，室町後期の「天神図」，江戸初期の狩野興以筆「花鳥図屏風」，池大雅の「山水図屏風」，貫名海屋の「山水図（雲泉秋景）」，江戸後期の伝椿椿山筆「渡辺華山像」などがある。

これらの作品の幾つかについては，保存状態に問題があって，修復のため日本に送られたのを機に，それらを含む名品の，いわば里帰り展が行われている。1995 年 9 月から 96 年 2 月にかけて，静岡県立美術館を皮切りに，岡山，奈良，佐賀，山口と巡回した展覧会もその一つで，この時の修復は，静岡新聞社と SBC 静岡放送の資金援助によるものであった。

竹村さわ子氏は，ホノルル美術館内のロバート・ランゲ財団浮世絵イメージ・プロジェクト主任である。

なお，浮世絵版画コレクションについては，『浮世絵聚花　ホノルル美術館』（ハワード・A・リング，楢崎宗重，山口圭三郎，小学館，1979）という画集が刊行されている。

3　日本図書

アメリカにおける日本研究図書館には，2 つの組織がある。

CEAL（Council on East Asian Libraries，東亜図書館協会）は，AAS（Association for Asian Studies, アジア学会）の下部組織で，主にアメリカとカナダの図書館とライブラリアンが会員である。設立の目的は，(1) ファカルティとライブラリアン相互に関係する東アジア図書館の問題を討議するための共通の場を提供する。(2) 東アジア図書館資料，書誌コントロール，およびアクセスのためのプログラムを形成する。(3) 東アジア図書館の発展とサービスに関する図書館間および国際協力を改善する，というものであり，機関誌を年に 3 回発行している。日本資料委員会は，その下部組織である。各図書館の蔵書数をはじめ，さまざまな統計資料を公開している。

NCC は，North American Cooddinated Council on Japanese Library Resources の略称で，全米日本研究資料調整委員会と邦訳されている。1991 年に設立され，その目的は，(1) 蔵書共同構築，アクセスの改善，日本研究ライブラリアンシップのための教育，その他関

連活動に関するプロジェクトのため，調整・開発および援助資金調達を行う。(2) 情報資料に関連するライブラリアン・学者・およびその他の関係者の集合的な必要性を明瞭にし，勧告を誘導するという目的にそった情報の収集，配付を行う。(3) 意義のあるプログラムを進展させるために，援助資金提供機関に対して，助言，協力を積極的に行う，というものであり，運営資金の助成を日米友好基金と国際交流基金から受けている。

その事業の一つに，多巻セット・プロジェクトがある。これは，全米でどこにも所蔵されていないか，1館でしか所蔵されていない日本語資料で，図書価格が10万円を越す多巻ものについて，審査により，図書価格の50%ないし75%を補助する代りに，他館から貸出請求があれば応じる義務が生じるというものである。2004年までに213タイトルの多巻ものセットが，このプロジェクトによって購入された。

カリフォルニア大学バークレイ校

UC 9校全体の蔵書数は約2,700万冊，UCバークレイのそれは約1,000万冊，そのうちアジア図書館には，中国書が約65万冊，日本関係文献は，約50万冊の一般図書に加えて，旧三井文庫蔵本が，約10万点ある。中国書の方が数がやや多いが，これは中国書の方が，本の価格が安いという事情もある。この日本図書の総数は，米国議会図書館を別とした研究機関の図書館としては，全米最多である。

旧三井文庫蔵本は，8つの小さな文庫，古地図，拓本，朝鮮本，などから成る，版本と写本を主とする文庫であるが，版本については整理が終り，『カリフォルニア大学バークレイ校所蔵三井文庫旧蔵江戸版本書目』（岡雅彦・児玉史子・戸沢幾子・石松久幸編集，ゆまに書房，1990）として上梓されている。写本については，仮目録が出来た段階である。UCバークレイでは，資料をデジタル化し，一般に公開する作業を積極的に進めている。

東アジア図書館では，年間4,000タイトルの本を購入している。ここに無い本は，カリフォルニア大学（UC）の他校，また他大学から借りられるシステムが出来ている。日本では，国立国会図書館や早大から借りることがで出来る。カリフォルニア大学はまた，州民にも図書館を開放している。近くのミルズハイスクールなどは，毎日バスを仕立てて，生徒を送り込んでくる。

UCバークレイには，2か所の保存図書館がある。今，新しい東アジア図書館を建設中であり，2007年に完成する予定であるが，ここに蔵書の8割を入れることができる。また，同じ本は原則として1冊しか受け入れないが，場合によっては，個人蔵書の寄贈も受け入れる。遠藤周作からは，生前に7,000冊ほどの寄贈を受けている。重複した本は，他の館

へ回したり，学生に安く売ったりする。配架するスペースがないという理由で，近年日本の図書館では，個人蔵書の寄贈を受け付けなくなっているが，必要な本だけ受け入れ，他は学生に安く売るというやり方は，ある意味できわめて合理的であり，参考にすべきであろう。東アジア図書館における配架方式は，中国書，日本書，韓国書の混配である。

石松久幸氏は，日本コレクションとレファレンスサービスのヘッドで，他に数人の日本人スタッフがいる。

スタンフォード大学

東アジアコレクションは，第二次世界大戦直後から，中国と日本に関する資料を集めている。その数約 43 万冊のうち，日本関係の書籍は，約 17 万 9 千冊である。従来フーバー研究所（Hoover Institusion）の東アジア図書館であったが，フーバー研究所図書館としての性格から，社会科学に関する図書が約半数を占める。文学 17%，歴史 25%，社会科学 50%弱という割合である。1945 年から 1952 年にかけて，東京神田に図書購入のための拠点を設けて，精力的に購入した。戦前に発行された資料，例えば南満州鉄道株式会社刊行物，労働運動，左翼・右翼関係資料，政府部内資料，また明治以降の政治家の自伝や日記類などに特色がある。

2001 年の 9 月より，スタンフォード大学図書館の分館となった。図書予算は，従来と同じであるが，多くの分野の図書を購入することになったため，個々の分野の予算は，充分でない。

本図書館が所収する版本については，粕谷宏紀氏が，『スタンフォード大学フーバー研究所 EAST ASIAN COLLECTION　江戸時代版本目録』（『語文』Vol.76, 1990）に著録されている。

日本関係の図書は，1 か所に集められている。UC バークレイの東アジア図書館とは協力関係にあり，例えば地方史の書物は，北海道から中部までをスタンフォード大学が，近畿から九州までを UC バークレイが分担して収集し，両者を合せるとほとんどを網羅している。

小竹直美氏は，日本図書の Bibliographer & Cataloger である。

カリフォルニア大学・ロサンゼルス校

本大学のリチャード・ルドルフ東アジア図書館（Richard C. Rudolph East Asian Library）を中心に，その所蔵する日本関係図書は約 16 万 3 千冊である。これはアメリカ

における大学図書館の中で，第 9 位に相当する。ここでも，中国図書約 25 万 5 千冊より少ない。アメリカにおける東アジア研究は，どちらかと言えば中国研究が中心であり，従ってその図書も日本図書より多い。ほとんどのアジア関係図書館で，館長は中国人である。

日本古典籍は約 1,300 点程あり，比較的良質のものである。これは 1962 ～ 63 年に購入した，リチャード・ルドルフ名誉教授の旧蔵本，1960 年代に購入した元高野山大学学長栂尾祥雲旧蔵の真言関係の仏教書，また絵本収集家ジュリアン・ライトの蔵書などから成る。

これらについては，『栂尾コレクション顕密典籍文書集成』（金岡秀友ほか監修，平河出版社，1981），『カリフォルニア大学ロサンゼルス校所蔵　日本古典籍目録』（鈴木淳・三木身保子編，刀水書房，2000）に著録されている。

カリフォルニア州では，新聞についても分担して収集が行われている。UCLA が毎日新聞，UC バークレイ校が日本経済新聞，UC サンタバーバラ校が読売新聞，スタンフォード大学が朝日新聞をそれぞれ担当している。

図書の配架は，中国書，日本書，韓国書の混配である。

マルラ俊江（Toshie Marra）氏は，Japanese Studies のライブラリアンである。

アメリカ議会図書館（Library of Congress）

蔵書数 1 億 3 千万点に達する世界最大の巨大図書館。本や印刷物ばかりでなく，版画，浮世絵，楽器，マニュスクリプト，デヴィジョン，手書原稿，レコード，フィルムなども含む。アメリカでも，すべての印刷物は，議会図書館に寄贈する義務がある。1875 年にアメリカ政府は日本政府と協定を結び，政府刊行物を交換することにした。1905 年には，クロスビー・スチュワート・ノイーズから 18 世紀後半から 19 世紀末にかけて板行された美術書のコレクション 658 点が寄贈されている。1906 年には，イェール大学の朝河貫一教授が，議会図書館の依頼を受けて選書，歴史，文学書を中心に約 9,000 冊を購入している。1930 年代には，初代日本課長として坂西志保が任命されているが，この時から秩序だった日本語図書の収集活動が行われるようになった。

第二次世界大戦後，日本語図書は急増する。それらの中に，ワシントン・ドキュメント・センターから譲渡された約35万冊に達する日本語図書がある。これらは，旧日本陸・海軍，南満洲鉄道株式会社，東亜研究所に所蔵されていたものである。

現在，日本の逐次刊行物は，約 17,000 種，年間約 2 万点が納入されている。

すべてで 470 種の言語のうち，日本語資料は約 115 万点。この数は，中国書より多いが，係員は中国書の方が多い。蔵書の構成は，人文科学系・社会科学系がそれぞれ約 40％ずつ，残りの 20％が総記，科学技術書，文献目録，その他の書物である。

上記美術書コレクションを含め，江戸時代の写本や版本が約 5,000 点あり，これらの目録が刊行されている（『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』日本古典籍目録刊行会編，八木書店，2003）。編集代表者渡辺憲司立教大学教授によって，議会図書館における日本蔵書の成り立ちが詳細に解説されている。

また浮世絵 2,215 件と奈良絵本 4 冊については，国際日本文化研究センターと共同でデータ・ベース化され，インターネットで閲覧できる。

これらの資料は，インター・ライブラリー・ローン・プログラムを通じて，国内の学術団体や研究機関に所属する研究者に貸し出されている。

日本セクションのライブラリアンは以前 4 人いたが，現在は太田米司氏と Eiichi Ito 氏の 2 人である。

プリンストン大学

東アジア図書館（The East Asian Library）の規模は約 63 万冊，中国書が約 44 万 3 千冊であるのに対し，日本関係図書は約 17 万冊，日本語図書の数ではスタンフォード大学やカリフォルニア大学ロサンゼルス校とほぼ同規模である。現在刊行中の雑誌 1,100 タイトル，マイクロフィルム・マイクロフィッシュ 16,000 をもつ。

中国書は，実業家のゲスト（Guion M. Gest）が収集したコレクション約 10 万冊に基礎を置く集書で，良質なものが多い。

日本語図書のコレクションは，1950 年代末に，坂本龍馬研究で知られるマリウス・ジャンセン（Marius Jansen）教授がプリンストンに赴任して以後に始まる。ジャンセン教授は，常時 2 ～ 3 人の客員教授を日本から招聘し，その教授達の協力を得て，基本的かつ重要な文献の収集に努めた。また当時刊行が始まったばかりの“K. B. S. Bibliography of standard reference books for Japanese studies with description”を用いて，組織的な蔵書構築をしたという。そのような経緯から，特に歴史書が充実している。

現在，歴史書は，ハーバード大学，コロンビア大学，イェール大学とこのプリンストン大学で，分担して集書を行っている。

レファレンス図書は，日本語・中国語・韓国語・英語で書かれた東洋関係書の混配であり，書庫は，日本語・中国語・韓国語図書の混配である。本の半分は，離れた保存書庫に

ある。

牧野泰子氏は，東アジア図書館の司書である。

コロンビア大学

本図書館の日本語資料の基礎は，角田柳作の尽力に負っている。彼は 1917 年にコロンビア大学で哲学を学んだ。そしてアメリカで日本文化に対する認識を深め，日本研究を盛んにするために，Japanese Culture Center の設立を構想する。日本に帰って，日本を学ぶアメリカ人を支援するために，日本語図書の寄贈をする必要を熱心に説く。三菱合名会社の岩崎小弥太をはじめとする財界人は，それに応えて多額の資金援助をしている。その資金で彼が収集した図書は，曲折を経て，1931 年に正式にコロンビア大学の日本語図書の中核となり，角田は文庫の主事となるが，同時に日本学を教えるようになる。

1930 年代の初めには，日本の宮内庁から 594 点の版本および写本が贈られている。さらに，1950 年代から 60 年代にかけて，吉田茂，池田勇人，佐藤栄作の各首相から，図書が寄贈されている。その頃から，文学方面のみならず，政治・経済方面の蔵書にも充実が計られるようになった。

ドナルド・キーン名誉教授より，日本の作家などからもらった，著者サイン入りの小説や，作家からもらった手紙などが，大量に寄贈されている。

コロンビア大学の C. V. スター図書館が有する日本図書は，現在約 30 万冊弱。UC バークレイには及ばないが，ミシガン，ハーバード，イェールの各大学図書館とほぼ並ぶ規模をもつ。図書館名は，1980 年代に C. V. スター氏より資金援助を受けたことから，このように命名されたものである。

図書館間の相互協力も進み，美術関係の本は，ワシントンのフリーア美術館と相互に融通し合っている。またマイクロフィルムに関しても，朝日新聞は各大学が共通に持っているが，毎日新聞はコロンビア大学，読売新聞はコーネル大学，日本経済新聞はプリンストン大学，産経新聞はハーバード大学と，それぞれ分担して購入している。

レファレンス・ルームでは，『世界大百科辞典』，CD-ROM 版『太陽』，『新編国歌大観』『朝日新聞戦後 50 年』の見出しなどが，パソコン画面で見ることができる。また，日・中・韓・外国語の書物が，コングレス方式によって配架されている。書庫は，古いものは日本十進分類法，新しいものはコングレス方式の配架である。

書庫はもちろん充分ではなく，コロンビア大学，プリンストン大学，ニューヨーク・パブリックライブラリー，この 3 機関共通の書庫がプリンストン大学にあり，コロンビア大

学の本の約 40％がそこに移されている。近くこれにニューヨーク大学が加わる予定である。

エミー・V・ハインリック（Amy V. Heinrich）博士は館長，日本の短歌研究者でもある。野口幸生博士は慶大出身，Japanese Studies のライブラリアンである。

ニューヨーク・パブリックライブラリー

パブリックライブラリーといっても，ニューヨーク市によって設立されたものではなく，民間からの寄付金で運営される独立法人である。

日本関係図書は 6 万冊以上あり，スペンサーコレクションにも，日本図書，絵本，絵巻物の貴重な資料が含まれている。コロンビア大，ニューヨーク大との間で共通入場券（1 日パス）を発行している。また，コロンビア大，プリンストン大との間で共通書庫を持っており，蔵書の約 40％はそこに保管している。

1993 年に講談社の野間氏の寄贈でレファレンスルームが改築され，「野間省一ルーム」と名付けられている。書庫は閉架式で，主題別分類である。

Sumie Ota 氏は，East Asia Section の Head で，日本図書を担当する唯一のライブラリアンである。

イェール大学

イェール大学の東アジア図書館は，現在約 24 万冊の日本語図書を有する。その中には，古文書，古文献も多く含まれている。1906 年に朝河貫一が，イェール大学図書館と米国議会図書館からの依頼を受け，日本に帰って，多くの要人に図書収集の必要性を説き，理解を得ることができた。その援助により，6 か月間日本を回り，古文書や版本を買い集めている。アメリカで，古文書や古文献を多く有しているのは，イェール大学，ハーバード大学，米国議会図書館などである。2006 年 9 月には，東京大学史料編纂所が日本関係の古文書について調査し，写真撮影をしているが，これはまずアメリカのウエブサイトに載り，次いで日本のウエブサイトにも載る予定である。

東アジア図書館では，日本語・中国語・韓国語で書かれたものは別置され，これらについては混配で配架されている。日本について英文で書かれたものは，一般図書の中に入っている。

エレン・ハモンド（Ellen H. Hammond）氏は，東アジア図書館のキュレイターで，日本語図書に精通している。中村治子氏は，日本コレクション担当のライブラリアンである。

ハーバード大学

1913年に，ハーバード大学に日本文明講座（The Professorship of Japamnese Literature and Life）が設置されることになり，東京帝国大学教授姉崎正治と同服部宇之が招聘された。この両教授がハーバード大学に寄贈した書籍が，今日の日本語図書の出発点となっている。1927年から裘開明によって，中国語と日本語コレクションの整理が始まり，同氏が編み出した独自の分類法が，イェンチン分類と呼ばれて，1990年代までアメリカの東アジア図書館で広く使われることになる。現在では米国議会図書館分類が一般に使われるようになり，1995年にイェンチン図書館もこれに変更した。

1928年には，アメリカのアジア研究の促進と，アジアにおける高等教育発展のために，イェンチン研究所が設けられ，ハーバード大学と北京の燕京大学にその拠点が置かれた。イェンチン研究所は，東アジア研究支援のために，研究図書館を設置した。初代所長は，セルゲイ・エリセイエフ（Serge Elisseeff）教授，第二代目が，エドウィン・ライシャワー教授であった。1960年代からは，人文科学分野だけでなく，社会科学分野の充実にも意が注がれるようになった。

ハーバード大学には，ワイドナー記念図書館を中心に90余りの図書館がある。全体の蔵書数は，約1,500万冊余りで，これは大学図書館としては，アメリカ最大である。イェンチン図書館の蔵書は，中国語図書約60万冊，日本語図書約29万冊，韓国語図書約65,000冊である。日本語の定期刊行物，約1,100タイトル。レファレンス，書庫共に言語別に配架されている。書物の約4割は，ハーバード・デポジトリーと呼ばれる遠隔書庫にある。

写本や版本は，約2,000タイトル，5,000冊，軸もの約100本。和古書・写本類の大部分は，『ハーバード燕京図書館和書目録』（岡雅彦・青木利行編，ゆまに書房，1994）に収められている。

本図書館の歴史や性格については，「ハーバード・イェンチン図書館の歴史および日本語コレクションの特質」（マクヴェイ山田久仁子，“Intelligence”6月号，2006）に詳しい。マクヴェイ山田久仁子氏は，イェンチン図書館日本語コレクション担当のライブラリアンである。

現代資料センターは，ハーバード大学図書館のH. C. Fung Libraryの一部である。1988年に，ちょうどその頃日本経済が好調で，日本に対する関心が高まり，そのニーズに応えるために設立された。社会科学に重点をおき，戦後日本の資料を集めている。6,000タイトル，7,500冊のコレクションで，イェンチン図書館と蔵書が重ならないようにしている。

坂口和子氏がセンター長である。

さらに，ロースクール図書館（Harvard Law School Library）や美術図書館（Fine Art Library）も，法律や美術に関する専門性の高い東アジアコレクションを形成しており，貴重な日本の古文書・古写本が含まれている。

ミシガン大学

ミシガン大学は，1817 年にデトロイトで設立され，1837 年に現在の地，アナーバーに移された。1942 年にアメリカ陸軍が，ミシガン大学に日本語学校を設立して以来，日本研究の一大拠点となった。当然，図書館も充実しており，アジア図書館（Asian Library）には，288,000 冊の日本語図書がある。ミシガン大学には，18 の図書館があって，法律や経済の本はそれぞれの図書館に入っており，日本語図書であっても，この数には入っていない。

中国語書籍の 388,000 冊には及ばないが，日本語書籍の数は，アメリカ議会図書館を別とすれば，UC バークレイに次ぐ規模である。

レファレンスには，中国語 1,100 タイトル，日本語 1,000 タイトルの定期刊行物がある。書庫の分類は，議会図書館方式であり，中国語，日本語，韓国語の混配による配架である。本は本館に約 55%，収納しきれないものについては，同じキャンパス内の別館に約 45%，分置している。

仁木賢司氏は，アジア図書館館長代理，日本コレクションのキュレイターである。

シカゴ大学

シカゴ大学全体の蔵書数は約 600 万冊。そのうち約半数は外国書である。大学図書協議会が，国家プロジェクトとして買っている本が，別に約 600 万冊ある。もっともこの中には，多少重複してカウントされているものもある。シカゴ大学図書館の年間増加数は，約 15 万冊である。

東アジア図書館（East Asian Library）の日本語図書の蔵書数は，中国語図書約 37 万冊に対し約 22 万冊，これは全米の大学図書館では第 6 位の規模である。その他日本語以外で書かれた日本に関する文献が 15,000 ～ 20,000 冊ある。1986 年まではハーバード・イェンチン方式を採用していたが，それ以後は議会図書館方式になった。

図書購入資金に，30 年前に大阪商工会議所から提供された資金（The Osaka Collection in Japanese Studies）1 億円がある。大阪とシカゴが姉妹都市であることによる。日本語の

本を購入する年間予算の半分はこれによっている。

1973 年に日本政府は，アメリカの大学における日本研究を支援するために，総額 1,000 万ドルを提供し，10 の大学に配分されたが，シカゴ大学もその恩恵に浴した。

また，ロバート・インガソル（Robert Ingersoll）元駐日アメリカ大使が，1980 年代に 100 万ドルの資金を提供した。こうした資金も，図書の購入に役立っている。

中国は大きな本のセットなどを寄贈してくる。入ってくる本は日本語の本の 2 倍である。

奥泉栄三郎氏は，東アジア図書館日本研究部門担当のライブラリアンである。『初期在北米日本人の記録』（文生書院，2003）を監修したのを始め，多数の編著書がある。

ハワイ大学マノア校

ハワイ大学マノア校は，中央図書館であるハミルトン図書館を中心に，蔵書数約 300 万冊，雑誌約 25,000 タイトルを有する。そのうち日本語図書は約 125,000 冊であるが，これとは別に特殊コレクションがある。それらは，

(1) フランク・ホーレー（Frank Hawley）文庫　1,000 タイトル 2,500 点の沖縄・琉球関係の資料。版本や巻物もある。

(2) オリバー・スタットラー（Oliver Statler）コレクション　日本の絵画や版画を海外に紹介したオリバー・スタットラーのコレクション。書籍及び 62 箱分の資料から成る。資料は書簡，研究ノート，原稿，参考文献，冊子，葉書，地図，版画類，写真，スライド，フィルムなど多岐にわたる。

(3) 高沢文庫　左翼運動家，高沢皓司氏より寄贈された資料，約 5 万点。

(4) 梶山季之文庫　作家，梶山季之から寄贈された朝鮮関係，移民関係，風俗関係の資料，約 7,000 点。

などである。

ハワイ大学の図書館は，社史・団体史の収集に努めている。約 1,400 タイトルのコレクションを持っている。川崎市の図書館と提携して，重複した本を寄贈してもらっている。

書庫は，中国語・日本語・韓国語図書の混配で，アメリカ議会図書館方式の配架である。

同じマノア校のシンクレアー（Sinclair）ライブラリーには，1975 年以前の日本語雑誌類が収蔵されている。

北米や日本の幾つかの大学と，本を相互貸借する制度が動き始めている。

山本登紀子氏は，日本文庫のスペシャリストである。

なお，アメリカの図書館事情に関しては，信州大学教授和田敦彦氏によって，アメリカ合衆国内の日本語図書コレクションが，いつ，どのように形成され，変遷してきたかを通史的に明らかにすることを狙いとして，文部科学省海外先進教育支援プログラムの支援を受けた「米国日本語図書蔵書史調査プロジェクト」による調査がなされており，近くその研究成果が公表される予定である。

4　日本語教育

英語を母国語とする者にとっての日本語は，ロシア語や韓国語などと並んで，習得するのがもっとも難しい言語の一つと言われている。かつては，日本の経済が活発で，バブルともいわれていた時代には，日本の企業に就職する目的で，日本語を学ぶ者が多かったが，経済が勢いを失った今，それに代って，マンガやアニメに代表される，日本の現代文化に対する関心から日本語を学ぶ者が増えている。

今のアメリカの若者は，子供の時から日本の文化に接している。日本がエキゾチックな存在だとは感じていない。むしろ身近なものとして親近感を増している。1980 年代の後半頃から，日本についての知識がなければ，教育を受けたとは言えないという認識が，だんだん広がってきた。90 年代に入ると，その傾向はますます強くなってきている。ただし，日本についての正確な知識があるわけではない。そこで，日本をもっと知りたいということから，日本語教育を受ける人の数が増えてきたのである。

アメリカで日本語を教える教師は，国際交流基金の調査によると，2003 年度現在，1,254 機関，初中等教育 1,174 人，高等教育 1,273 人，学校教育以外 711 人，計 3,158 人である。日本語学習者は小中等教育 87,949 人，高等教育 42,018 人，学校教育以外 10,233 人，計 140,200 人。この数は，以前に比べるとやや増加してきている。小中等教育で学ぶ者の多さが注目される。アメリカ全体に，日本語教育が根づいてきている。アメリカでの日本人移民の少なさからすると，これは画期的とも言える。

アメリカにおける日本語教員は，全体として約 6 割が日本人である。大学段階になると，その割合はさらに増加する。その点，外国語教育が，主に日本人の手で行われているわが国の場合とは，かなり事情が異なる。

日系 3・4 世は，日本語を話すことは出来るが，読み書きが出来ない，というものが多い。しかし，日本語を学ぶ意欲は旺盛である。

中学・高校でもかなり日本語教育が行われている。中には，サンフランシスコのクレラ

ンドン小学校のように，小学校から日本語を教える所もある。スタンフォード大学の近くにあるパロアルト・ハイスクールでは，生徒数 1,700 人のうち，日本語クラスの受講者が 170 人いる。生徒は，60 分間の授業を週 4 回受ける。日本語教員は 4 人である。

ただ，アメリカ政府の方針で，外国語教育に対する予算が減らされ，たとえば，カリフォルニア州では，2002 年には日本語教育に対する予算を減額してきている。

「ジェット・プログラム」は，日本政府の方針で，日本の小中高校の英語教育指導補助員をアメリカから送る制度である。すでに 20 年近く実施されている。アメリカからは，約 2,500 人が日本へ行く。大学を卒業した 25 ～ 30 歳の人が対象となる。地方自治体が受け皿となっている。採用になるのは，アングロサクソン系の人ばかりであるが，アジア系の人間で英語がよくできる者も採用して良いのではないか，という意見もある。

アメリカの大学の日本語教育機関が，日本国内に幾つかある。

横浜にある「アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター」は，1961 年に設立された「スタンフォード・センター」を前身としている。主に北米の大学生・大学院生を対象に中・上級日本語集中教育を行う，日本語の教育・研究機関である。日本研究者を目指している学生が中心だという。現在加盟大学は，コロンビア大学・コーネル大学・ハーバード大学・インディアナ大学・オハイオ大学・プリンストン大学・スタンフォード大学・カリフォルニア大学バークレイ校・カリフォルニア大学ロサンゼルス校・シカゴ大学・ハワイ大学・イリノイ大学アーバナシャンペイン校・ミシガン大学・南カリフォルニア大学・ワシントン大学・イェール大学の 16 校である。京都にも「アメリカ大学連合」があるが，京都が学部生を対象としているのに対し，横浜は大学院生や大学院進学予定の学生が多いという特色がある。約半数の大学が，京都と横浜の両方に加盟している。学生は毎年約 40 人，専任教員 9 人，非常勤講師 10 人程度で，施設や備品は，横浜市が提供している。

「国際交流基金日本語国際センター」は，1989 年に国際交流基金の付属機関として，さいたま市に設置され，(1) 海外の日本語教師の招聘研修，海外に派遣する日本人教師の派遣前研修，(2) 日本語教材の開発および制作，海外における教材の開発と出版に対する支援，日本語教材寄贈，を目的に活動を行っている。毎年 50 以上の国や地域から，500 人以上の研修生が参加している。3 週間から 9 か月の研修が行われる。また，日本語教材が不足している海外の日本語教育機関に対して，日本語教材を寄贈するプログラムを実施している。アメリカにおける日本語教育を担当しているのは，国際交流基金ロサンゼルス事務所である。

函館市に「北海道国際交流センター」がある。1986 年から日本語・日本文化講座夏期

セミナーを実施しており，2006年で20周年を迎えた。6月中旬から8月中旬までの8週間，参加者全員が日本の家庭でホームステイしながら学ぶところに特色がある。定員60人のうち50人以上がアメリカの学生である。プリンストン大学の牧野成一教授がコンサルタントを，南山大学の鎌田修教授がアドバイザーを務める。研修を受けた者は，1,135名に及ぶ。

中国や韓国も，それぞれの国語を外国で教えることに力を注いでいる。

韓国も，1990年にはコリア・ファンデーションが，カリフォルニア大学ロサンゼルス校に，最初の韓国語講座を作っている。

カリフォルニア大学バークレイ校

日本語の履修生は，1年目約400人，2年目100～200人，3年目100人弱，4年目40人弱，5年目15人前後である。クラスサイズは1クラス約25人，3年の上級クラスで30人，1回の授業時間は50分で，学生は週5コマを履修する。4～5年目になると，週3コマになる。ティーチング・スタッフは，専任8人，パート2人，アシスタントが2人である。

大学院生は，中国語や中国史を学んでいるものも，日本語コースを受講しなければならない。中国系，韓国系の学生もよく履修する。生物学やコンピューターを学ぶ学生も，受講している。バークレイでは，日本語専攻の学生の方が，中国語専攻の学生より多い。また，大学全体として毎年1,000人ずつ学生を増やしていることもあり，日本語履修生は減っていない。

バークレイの学生の半分以上は東洋系の学生であり，中学や高校ですでに日本語を勉強した学生が，かなり入ってくる。

サンフランシスコ大学

日本研究プログラムは，1990年ごろに出来た。日本専攻が出来てからは，まだ日が浅い。専攻生は15～20名程度，日本語履修生は最初の学期で約60名である。また，日本語カリキュラムは約3年間である。

スタンフォード大学

経済の好況時は日本語履修者も多く，初級だけで7～8クラスあったが，経済が失速して学生が減少した。今は約180名である。日本語担当教員数は7名，全員が日本語を母語としている。スタンフォードがもともと作った京都アメリカ大学連合や横浜のアメリカ・

カナダ大学連合に学生を送っている。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校

日本語担当教員は全体で 12 名，うち日本語を母語とする者が 8 名である。中国語履修者が増えているのに対し，日本経済に勢いがないせいか，ひと頃より日本語履修者は減っている。Department of Asian Languages and Cultures だけで約 300 名である。

古典語を履修する者はさらに少なく，大学院生で上級約 10 人，中級約 20 人，初級約 40 人である。

南カリフォルニア大学

日本語履修者は，月曜日から木曜日まで，毎日 1 時間ずつ日本語クラスで学ぶ。日本語を指導するフルタイムの教員は 3 名，そのほか 6 ～ 7 名の大学院生に手伝ってもらっている。この大学では，ヨーロッパ語に次いで，日本語の履修者が多い。学生は，初級クラスで約 200 人弱。しかし，ひところに比べると減少気味である。

ジョージ・ワシントン大学

日本語履修学生は，1 年生で 65 ～ 70 人，4 年生で約 20 人，この数字はここ数年安定している。中国語履修者は明らかに増えており，現時点では，中国語履修者の方が，日本語履修者よりも多い。履修動機が漠然としている学生もいる。日本語は科目としてはやや異色で，変ったことがしたい人，流れから外れることに喜びを感ずる人が，選択する傾向があるという。ティーチングスタッフは，フルタイム 2 人，ハーフタイム 1 人，中国語はフルタイム 3 人，ハーフタイム 2 人である。

ペンシルヴァニア大学

日本語履修者は，初年度 200 人前後である。この数は，近年安定している。最近は，高校で日本語を勉強してくる学生が増えてきた。この大学には，ワートン・スクール・オブ・ビジネス（Wharton School of Business）があり，ペンシルヴァニア大学の中でも，名門として知られるところである。ここに所属する学生で，日本語を勉強する者が，かつては 50％いたが，今は中国語の方が優勢である。

プリンストン大学

1年60人，5クラス10人ずつ，2年2クラス，それぞれ12～13人，3年2クラス，4年2クラス，5年及び6年，各1クラス。夏休みに1年分を勉強することができるので，実際には4年間で6年分を履修することができる。クラスサイズが10人というのは，かなり恵まれているといえるであろう。日本語の履修者は，横ばい乃至漸減の傾向を示している。日本語担当者は，フルタイムの教員が4名である。

プリンストンは，もともと中国語が強い。中国語履修者は，日本語履修者の約2倍いる。また，プリンストン・ハイスクールには，良い日本語プログラムがある。

コロンビア大学

コロンビア大学における日本語の履修者は，全体で200人弱である。1年生50～60人，5年生になると，7～8人に減少する。日本語教員は，フルタイムが8人，その他に日本人のティーチング・アソシエイトが7～8人いる。

ニューヨーク大学

1年5クラス，定員14名だから1年全体で70名，全体では180名の履修者がいる。日本語教員は4名，その他に日本文化・日本歴史・ポップカルチャーなどの担当者が5～6名いる。ニューヨーク大学でも，中国語履修者が増えてきており，日本語履修者よりも若干多い。日本語を履修する動機は，60～70％の学生が映画・アニメなどの日本の文化が好きだからだと答える。

イェール大学

中国語履修者約300名に対し，日本語履修者は，約120名。ティーチングスタッフは，日本人の教員が6名。1年生は50人ほどであるが，かなり多くの学生が高校の時から日本語を学んでおり，全く零から学ぶ学生は，そのうちの約半分である。最初から上級クラスに入る学生もいる。毎年30人弱の学生が日本に留学する。半年だけの学生もいれば，1年行く学生もいる。日本に留学して，強い印象を受けて帰ってくる学生が多い。日本で就職したり，あるいはアメリカ企業で，日本に支店がある所に就職する学生が増えている。

ハーバード大学

1年から5年まで，合せて約110人ほどの日本語履修者がいる。1980年代は，日本語履

修者が多かった。中国語のそれの2倍，約300人近くいた。当時は皆ビジネスに関心があった。1994年頃から日本語履修者が減ってきた。今は中国語履修者約300人より少ない。

最近の日本語履修者は，日本の文化，アニメ，大衆文化に関心があり，日本語を学習する動機はまちまちである。

日本語教育担当者は9人，すべてフルタイムである。

マサチューセッツ工科大学（M. I. T.）

日本語クラスは，1年生は秋学期約90人，春学期約70人，2年生秋学期約40～50人，春学期約40人である。ここまでの日本語集中トレーニングが済むと，その後3か月から1年間学生を日本の会社へ送り，インターンシップに参加する。会社側がある程度の給料を支払い，本人に経済的負担はない。毎年30人～40人の学生を送る。M. I. T. における日本語教育は，このインターンシップをサポートするためにある。

日本語教育担当者は，フルタイムが3人，非常勤が1人である。

最近のアメリカの学生は，翻訳されていないアニメを見て，自分で翻訳してインターネットに載せたいというのも，日本語を履修する，大きな動機となっているという。

ミシガン大学

日本語履修者は，1年秋学期のスタート時には200人以上，冬学期になると140人程度，2年100人弱，3年45人，4年はビジネスクラスと合せて約20人，5年生5人，全体で300人弱である。2年までに基本的文法を教える。2年を終えてから日本へ行くように指導している。クラスサイズは15人程度，このうち，約3分の2はアメリカ人，3分の1が韓国人・中国人などのアジア人である。

ミシガン大学では，中国語履修者より，日本語履修者の方が多い。これは，日本語教育や日本学の長い伝統があることに加え，近くのデトロイトで，自動車産業を中心とする日系企業の生産活動が，活発なことによるものであろう。

ただ，ミシガン大学における外国語の履修者の数は，スペイン語，フランス語，ドイツ語，イタリア語，日本語の順であり，日本語は第5位にとどまる。

日本語のティーチングスタッフは，フルタイム7人，大学院生の補助教員が2人である。

滋賀県彦根市に，「ミシガン州立連合日本センター」（JCMU）がある。これは湖の縁で生れた滋賀県とミシガン州の姉妹提携20周年を記念して，1989年に設立されたもので，多くの国際交流事業を行っている。

ミシガン大学の学生も，日本語を 2 年間学習してから JCMU に行く者が多い。期間は，夏のみであったり，1 学期間であったり，また 1 年間行く学生もおり，さまざまである。

シカゴ大学

1 年から 4 年まで，日本語の履修者は約 100 人余り，これはシカゴ大学の学生が学部と大学院合せて約 1 万人であるから，その約 1%に当る。この数は従来と余り変化はない。むしろ微増と言えるかもしれない。一方，中国語学習者は顕著に増加している。

3 年生で日本へ行く学生もいる。「京都アメリカ大学連合」（KCJS）へは，通常 2 ～ 3 人，多い時で 5 人程度行く。1 学期間という学生もいるが，なるべく 1 年行くように指導している。早大へも 2 ～ 3 人行く。

シカゴ大学の日本語教員は 4 人，試用期間は 2 年である。シカゴでも小中学校で日本語を教える学校もあり，大学に入った段階では，日本語がある程度出来る学生も一定数いる。

ハワイ大学

ハワイ大学の学生は，全部で約 2 万人。アジア系の学生がそのうちの半分を占める。日本語の履修学生は，約 1,200 人。ハワイでは，すべての外国語の中で，日本語履修者が最も多い。

1 クラス 15 人前後，初級は 20 クラスほどある。1 ～ 2 年初級で週 4 回，上級で週 3 回，毎回 50 分の授業を受ける。教員は約 40 人いる。

ハワイにおける日系人の割合は約 25%であり，すべての高校で日本語を教えている。そのような学生は，初めから中級か上級クラスに入る。1980 年代は，日本の経済に勢いがあり，日本語教育ももたいへんな活況であった。1990 年頃から勢いが衰えてきたが，最近は安定してきている。

5　日本宗教

アメリカにおける仏教は，移民の歴史と密接な関係がある。1868 年に最初の移民がハワイに渡ってから，ハワイとカリフォルニア州に移民が次第に増えていった。日本人コミュニティーに死者が出る。葬儀をしなければならない。やはり，寺と僧侶が必要だというところから，日本から僧侶が呼ばれ，寺院がつくられるようになったという。

従って，寺は日本人移民のためのものであって，アメリカ人に仏教を布教する目的のた

めにつくられたものではなかった。当然，日本人が多く住むところに，寺がつくられた。

浄土真宗

中でも寺院の数が多いのは，浄土真宗である。西本願寺系の寺は，カリフォルニアを中心にアメリカとカナダで 50 数か寺ある。ハワイにも約 20 か寺ある。古いものは約 90 年から 100 年の歴史をもつ。

サンフランシスコの Buddhist Churches of America は，信徒数約 400 家族，アメリカ人がそのうちの 1 割，近在に日本人墓地があり，納骨堂もある。ただ，その墓地は，キリスト教とも共存する形のものである。

ロサンゼルスの本派本願寺羅府別院は，会費を払っている会員が約 1,000 人，パロアルト寺院は日系人約 400 人，経文は日本語で唱え，説法は英語でする。これは他の寺院でも大体同じである。ハワイの Honnpa Honganji Mission of Hawaii では，1960 年には 15,000 家族であったものが，今は半減している。宗教がだんだん個人のものになってきたのである。ニューヨークの New York Buddhist Church は，日曜日の礼拝に 50 ～ 60 人集まる。アメリカ人と日本人の比率は約 7：3 で，アメリカ人の方が多い。仏教が大同団結するには，釈迦まで戻らなければ駄目だと，住職の中垣顕實氏は言う。

ロサンゼルスの南カリフォルニア大学の近くに，洗心寺という寺がある。55 年前に西本願寺から独立しているが，1910 年に雅楽のグループが出来，以来今日まで活動を続けている。東儀氏の指導を受け，舞楽と合せて 30 人の会員がいる。

東本願寺系の寺は，北米に 4 か寺，ハワイに 6 か寺ある。ロサンゼルスの真宗大谷派東本願寺ロサンゼルス別院は，2004 年に 100 周年を迎え，ロサンゼルスの仏教寺院の中では，最も古い。宗教活動は，ほとんど英語で行われる。

ロサンゼルスには，東西の浄土真宗の他，浄土宗や真言宗，禅宗寺院など，仏教諸宗派の寺院が集中している。

浄土宗・真言宗

浄土宗の寺院は，アメリカでの開教がやや遅れた。ロサンゼルスの Jodoshu North America Buddhist Missions は，70 数年の歴史をもち，信徒数は 120 ～ 130 名である。そのほとんどは日系人である。アメリカ人は行を好む傾向があり，念仏はなかなか入り込めないという。

同じロサンゼルスの高野山米国別院は，1912 年の創立であるから，すでに 90 年余りの

歴史をもつ。僧侶 4 人，檀信徒数 400 ～ 500 人。1930 年に出来たホールは，さまざまな催しや芸能大会が行われ，1983 年に文化会館が出来るまでは，ロサンゼルスにおける日系社会の文化センターの役割を果した。

以上の仏教諸宗派は，主として日系人を対象に宗教活動を行っており，アメリカ人に布教しようとする意欲は，比較的弱いという印象を受ける。現在日系社会は 3 世，4 世が中心となっており，配偶者はアメリカ人であるケースが多い。中国人は，中国人同士で結婚する傾向が強いが，日本人はむしろアメリカ社会に溶け込もうとする傾向が強い。新たな移民がきわめて少ない現状では，この傾向は，今後ますます強くなるであろう。そうすると，仏教諸派の活動に関しては，将来の展望は必ずしも明るくない，ということになる。

アメリカ人にとって，仏教に関心があっても，それが日本の仏教でなければならない必然性はない。1960 年代と違って，今アメリカでは，チベット仏教が日本仏教よりも多くの関心を集めている。ダライ・ラマがしばしばアメリカを訪れて，講演している。多数の本も書いている。日本の禅以上に盛んである。日本の仏教も国際的な布教を真剣に考えるなら，このあたりで抜本的な対策を考えることが必要であろう。

禅宗

その点，禅宗は，以上の諸宗派とかなり状況を異にする。禅宗ももともとは，日本人コミュニティーの必要性から各地に寺院がつくられてきた。そこに鈴木大拙が登場する。

鈴木大拙は本名貞太郎，1870 年に金沢で生れ，東京帝国大学に学んだ。その頃から座禅を始め，師の釈宗演より「大拙」の居士号を受けた。1897 年に渡米し，約 12 年間をアメリカで過ごした。帰国後，学習院教授，大谷大学教授，またコロンビア大学客員教授などを歴任したが，日本と欧米を往来しつつ，仏教の研究と西洋への紹介に力を注いだ。

西洋に多くの学ぶべきものがあるが，東洋にも西洋に紹介すべきものが多々あり，殊にそれは宗教と哲学方面だというのが信条で，英語で精力的に紹介活動を行った。

約 100 冊の及ぶ著書のうち，約 4 分の 1 が英語で書かれている。中でも『禅と日本文化』（岩波書店，1940）は，わが国でも多くの読者を獲得したが，これは，原著“Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture”（The Eastern Buddhist Society, Otani Buddhist College, 1938）の前編 6 章に，別に「禅と俳句」という 1 章を新たに加えて，北川桃雄が邦訳したものである。この英文で書かれた原著が，欧米の読者に与えた影響は，きわめて大きかった。特に知識層に浸透し，非常に大きな尊敬を受けている。

鈴木大拙はさらに, 1950年から1958年にかけてアメリカに住み，ハワイ大学，ハーバード大学，イェール大学，プリンストン大学などで講演した。ハワイの会場でも，300～500人が集まり，会場が一杯になったという。初めは宗教としてではなく，文化や思想として受け入れられた。それに触発されて，禅の指導者が数人アメリカに渡った。鈴木俊隆もその一人である。

鈴木俊隆は，1959年にアメリカのサンフランシスコに渡り，禅の指導をする。ハワイ曹洞宗開教総監・町田時保氏によれば，鈴木俊隆はいわば寒山拾得的な人物で，座禅を通して人を救うことにしか関心がなく，やや屈折した心情を持った日系社会には必ずしも受け入れられなかったという。しかし白人には認められ，彼の指導によって，禅は浸透する。今，彼はアメリカの道元とも呼ばれており，その著作“Zen Mind, Beginner's Mind”（Weatherhill, 1970）は，サンフランシスコ禅センターのバイブルとなっている。

大拙が禅を説いた1950年代，サンフランシスコには，ビート族が多かった。このビート族たちがまず禅を受け入れた。ビート族たちは，まずもって反体制，反アカデミズムであったから，実践的宗教としての禅は，アカデミズムよりは，一般の人々，社会の周縁部にいる人々の中でまず広がりをみせることになるのである。

サンフランシスコには，市中心部に桑港寺，北郊にグリーン・ガルチ・ファーム（Green Gulch Farm），市南部にサンフランシスコ禅センターがあり，またタサハラ（Tassajara）にも拠点がある。このうち最大の組織は，サンフランシスコ禅センターで，2つの建物に，60人が住込みで修行生活を送っている。この建物は1968年に購入したもので，かれこれ40年活動を続けている。禅の道場としては，アメリカでもっとも古い。日本人も多少いるが，ほとんどはアメリカ人を始めとする外国人であり，英語で説法が行われている。このサンフランシスコ禅センターは，鈴木俊隆の弟子，リチャード・ベイカー（Richard Baker）によって組織化され，発展した。現在，日本の寺院組織に登録している禅の信者は数百人いる。

アメリカには，約200の禅センターがある。禅の修行者も，全体の統計はないが，アメリカ全土で数千人はいるといわれる。神の支配から逃れたい人々が，しばしば禅の世界に飛び込んでくる。殊にカトリックから転向してくる者が多い。こうした人々は，今後も増え続けるであろう。

日本の場合は，世襲制度の中で，僧侶となるのが一般的であるが，アメリカの場合は，本人の強い意志で，多くの場合キリスト教から改宗して仏教徒になるだけに，熱心に修業に打込む者が多い。頭髪を剃り，墨染めの衣を着用する者も少なからずいる。

今，アメリカで起っている問題は，こうした禅信徒が日本の宗門を離れ，独自の動きを見せていることである。アメリカ人が，独自に受戒を行ったりする。日本の禅宗寺院と見解の相違が生じている。アメリカ人にとって，禅が必ずしも日本のものである必要はないのであり，仏教の根源に帰ろうとする動きは，絶えず出てくる。宗教も新しい土地に根を下ろせば，独自の発展を遂げていくことになるのは，ある意味で歴史の必然ともいえる。恐らく，アメリカの禅は，日本とはまた違った形で発展していくことになるのであろう。浄土系の仏教が，アメリカ社会に容易に浸透していかない中で，禅は直接言葉を介在しないものであるだけに，受け入れられやすいとも言える。禅の修行者は，今後ますます増える傾向にある。

創価学会

新興宗教では，創価学会の活動が盛んである。黒人のリーダーも育っている。第二次大戦後，アメリカに連れ帰られた，いわゆる戦争花嫁と呼ばれた人々に，仏教の既成の教団は冷たかったが，それらの人々に救いの手を差し伸べたのが，創価学会だという。

神道

神道は，ハワイに出雲大社を持っている。1906 年の創設であるから，2006 年でちょうど 100 年になる。初詣には 1 万人，相撲大会や演芸大会を行う秋祭りには 3 万人の参拝者があるという。ハワイには出雲大社を含め，4 つの神社があるが，アメリカ本土にはない。

6　俳句

俳句は，20 世紀に入る頃から，イギリス人の W・G・アストン，同 B・H・チェンバレン，フランス人のポール・ルイ・クーシュー，ドイツ人のカール・フローレンツなど，主としてヨーロッパ人の著作によって，西欧に紹介された。

アメリカで，人々の俳句に対する関心が高まってくるのは，第二次世界大戦後のことである。

戦後数年経った頃から，アメリカでは鈴木大拙などの影響で，禅に対する関心が次第に高まってくる。彼は俳句の本質を，禅の精神と結びつけて説いた。すなわち，俳句を理解することは禅宗の「悟り」体験と接触することだとする。そして，それに呼応するかのように，俳句の優れた入門書が次々に出版されるようになった。

イギリス人，R・H・ブライス（Blyth）は，1949年から1952年にかけて『俳句』4巻（北星堂）を英文で出版している。この本が，アメリカ各地の大学図書館，学校図書館，公共図書館に納入され，広く読まれることになった。この本の中で俳句約3,000句が英訳され，アメリカ人が実作する上で，良き手本となった。彼は俳句という文芸に心酔し，1954年にはその俳句研究によって，東京大学から博士号を取得している。また鈴木大拙を師として仰ぎ，禅の修行にも打込んだ。後に学習院大学教授となり，当時の皇太子に英語の指導もしている。

禅と結びついた俳句は，1950年代にまずサンフランシスコのビート族に受け入れられ，一般の人々の間に浸透していくことになる。

こうした傾向をさらに推し進めたのが，1958年にハロルド・G・ヘンダーソン（Harold G. Henderson）によって書かれた『俳句入門――芭蕉から子規に至る俳句と俳人のアンソロジー――』“An Introduction to Haiku: an anthology of poems and poets from Basho to Shiki ”（Doubleday）である。ここには，俳句381句が英訳されている。これは200ページ足らずの手頃な本であったこともあって大いに売れ，20万部を売り尽くしたという。これは詩の翻訳書としては異例ともいうべき数字であった。引き続き彼は『英語俳句』（“Haiku in English”, C. E. Tuttle, 1967）を書く。これは俳句の作り方について説いたものであったが，この2著によって，俳句はアメリカ人に一層親しいものとなるのである。

一方，ビート世代のアレン・キンズバーク（Allen Ginsberg）やゲーリー・スナイダー（Gary Snyder）などは，禅の影響下に俳句を作った。

ゲーリー・スナイダーは，1930年サンフランシスコ生れで，カリフォルニア大学バークレイ校に学んだ後，1956年～57年，1959～65年に禅の修行のために来日，相国寺と大徳寺で真剣に参禅している。1967年～68年には，鹿児島県の小島・諏訪瀬島で過し，自給自足の農耕，漁民生活を体験している。やがてエコロジー運動の教祖的存在としても知られるようになる。1974年には，詩集『亀の島』によって，ピューリッツアー賞を受賞している。

また，ジャック・ケロアック（Jack Kerouac）は，“Dharma Bums”（Buccaneer, 1958）という小説を書いたが，ここには禅や俳句が取り上げられている。登場人物のジェフィー・ライダーのモデルは，ゲーリー・スナイダーだといわれている。この小説はビートの代表作として広く読まれたから，こうした小説が，一般の人々が俳句や禅に関心を持つきっかけの一つになったということは，充分に考えられる。

1968年に，英語で俳句を作り，楽しむことを目的として，アメリカ・ハイク協会

（Haiku Society of Amerika）がニューヨークで設立された。これは日本協会（The Japann Society）の支援によって実現したものであるが，これには日本協会の元会長で当時名誉理事であったハロルド・G・ヘンダーソンの尽力によるところが大きい。

定期的に講演会・句会・研究会・作品発表会・コンテストなどを開き，季刊の機関誌“Frogpond”（蛙池）を刊行している。

約 800 人から 900 人の会員で構成され，アメリカ最大のハイク協会である。そのほとんどはアメリカ人であるが，中には中国人もいる。日本人は 2 ～ 3 人である。1976 年には，ハロルド・G・ヘンダーソンを記念する，一般募集のハイク賞（Harold G. Henderson Memorial Award）が設けられ，注目を集めている。

日本にいちおう興味はあるが，基本的に日本から独立している。季語は入れなくてよい。シラブルも 5・7・5 でないのが大半を占める。しかし，5・7・5 や，有季定型を試みる者もいる。一行俳句を今でもやる者はいるが，普通は 3 行詩である。2 行で作ったり，中には 7 ～ 8 行で作る者もいる。日本と同じように吟行もする。

定期大会を年 4 回開く。しかし，その場では作らない。予め作ってきた俳句を 2 句まで披露する。誰も批評しない。良い句には拍手したりする。会の最後に句の内容と関係のないレクチャーがある。句は機関誌に発表する。宗匠はいない。編集者が選句もし，いわば宗匠的な役割を果たしている。アメリカに団体はあっても，いわゆる結社はない。個人の個性を貴ぶアメリカでは，自由に作るから面白いということで，他人が自分の作品に手を入れることは，認めがたいのであろう。結社や宗匠制度は成り立たないのである。

ニューヨーク在住の佐藤紘彰氏は，1979 年から 1981 年まで，アメリカ・ハイク協会の会長であった。アメリカの俳句事情に精通しており，上述のアメリカにおける句会の模様も，多く氏の教示に負っている。

“Modern Haiku”（モダンハイク）も，日本以外では最も歴史のある，質の高い句誌である。ウィスコンシン州マディソンで，1969 年に創刊されもので，現在はリー・ガーガ氏が編集に当っている。ハイク作品の掲載みならず，日本の俳句の翻訳や，古典俳句の紹介にも意が注がれている。もともと季刊であったが，現在は年 3 回の発行である。各大学や公立図書館からの購読もある。

日本の俳句文学館が所蔵する，アメリカで刊行された俳書の目録が，俳人協会より上梓されている（『俳句文学館蔵書目録外国語俳書篇』俳人協会国際部編，2003）。これには，英語による句集・研究書 882 冊，中国語による句集・研究書 28 冊，それ以外の外国語による句集・研究書 442 冊，外国語俳句雑誌 1,136 冊，計 2,488 冊が収載されている。

現在アメリカでは，小学校段階からハイクが扱われている。ハイクには韻がないこと，自然を題材とすること，それにはしばしば季節があること，3 行で書くこと，各行は 5・7・5 の音節であることなどが教えられ，実作の指導が行われている。「Haiku」は今や，アメリカ人誰もが知っている英語である。日本の俳句が，アメリカの子供たちの文章力の向上と，詩的感性の陶冶に多少でも役立っているとすれば，誠に結構なことである。

アメリカにおけるハイクは，日本語ではなく英語で作られる，というところに最大の特徴がある。佐藤紘彰氏の“One Hundred Frogs”（『百匹の蛙』Weatherhill, 1983）には，「古池や蛙飛びこむ水の音」という芭蕉の句の英訳が，100 例以上示されている。すなわち，訳す人が異なれば，その人の数だけ訳文も違ってくるということである。これは詩における翻訳は可能か，という問題にもなってくるが，詩の形が極端に短いだけに，この事実が提起する問題は小さくない。

季語の問題も，四季が規則正しく訪れ，自然のさまざまな現象が，人々の生活と密接な関係をもっている日本と違い，四季の変化がなかったり，雨期と乾期の区別しかないような国とでは，自ずから自然に対する感覚は異なる。その上，もともと欧米は，自然よりは，人間中心の世界観をもつ国々なのである。アメリカ人が季語を入れない句を作っているとしても，これは已むを得ぬことであろう。

また，英語で 5・7・5 の音節でハイクを作ると，表現される内容が多すぎて，冗長になるために，実際にはもう少し短い 3 行詩で書かれるのが普通である。

季語もない，5・7・5 の形式も踏まないということであれば，英文で作られるハイクは，日本の俳句とはかなり違ったものにならざるを得ない。現在，ハイクは世界の 50 か国，30 言語で行われ，約 100 万人の人々によって作られているというが，日本人の目から見ると，優れた句はほとんどない。けれどもそれらが日本の俳句から生れたものであることは，間違いないことである。日本の俳句の，海外における新しい展開の姿として，われわれは，この事実をあるがままに受け入れ，喜ぶべきなのであろう。東西文化の新しい融合の形として，今後のより良い発展が期待されるのである。

7　翻訳と出版

「アメリカにおける日本文化」という主題にかかわる英文による出版物には，日本語で書かれたものが，英語に翻訳されたものと，こうしたテーマで英文で書かれたものとの 2 種類ある。

まず，日本文学が英語に翻訳されたものと，英文で書かれた研究書・研究論文については，国文学研究資料館の伊藤鉄也氏によって整理されている。

1，海外における上代文学（国文学研究資料館，2006.2）

2，海外における平安文学（国文学研究資料館調査収集事業部，2005.2）

3，海外における源氏物語（国文学研究資料館，2003.12）

4，海外における日本文学研究論文１＋２（国文学研究資料館，2006.3）

これらは，文部科学省科学研究費補助金による研究成果の報告書として，公表されたものである。1・2 は，それぞれ上代文学，平安文学について，翻訳書，翻訳関係の研究書・研究論文一覧を集成する。ただし，作品ごとに，また時代順に整理してあるが，諸言語をまとめて扱っており，英文だけを独立させたものではない。共にサイトや映画の一覧も載せている。4 は，海外の諸言語で書かれた日本文学に関する研究論文 5,000 本以上を，言語別に収載したものである。英語で書かれた論文は，そのうちの 87 ページ分，1,000 本余りである。1 ＋ 2 とあるのは，その 1 が 2005 年 2 月に出ており，それを基に増補した内容のものだからである。

1600 年までの日本古典文学の翻訳のデータベースに，マイケル・ワトソン氏（明治学院大学）の http://www.meijigakuin.ac.jp/~pmjs/trans/trans.html があり，同氏と緑川真知子氏によって，「日本古典文学翻訳データベース」（『日本文学翻訳の可能性』所収，風間書房，2004）に活字化されている。ただし，これも英語のみならず，諸言語による翻訳を含んでいる。

比較的新しいものについては，ハルオ・シラネ氏による解説が付された

EARLY MODERN JAPANESE LITERATURE: An Anthorogy 1600–1900（Columbia University Press, 2002）

がある。

現代を含む日本文学作品の翻訳については，国際交流基金のサイト，出版物案内の「日本文学翻訳書誌検索」に詳しい。

http://www.jpf.go.jp/j/publish_i/index.html

ひと頃は海外における日本文学といえば，まず川端康成，谷崎潤一郎，三島由紀夫などであったが，今は村上春樹，吉本ばなな，桐野夏生といった作家たちの名前があがる時代になってきた。

なかでも，村上春樹の人気は抜群である。ハーバード大学の書店でも，村上ものが，書

棚のワン・ブロックを10年前から占め続けている。その講演会には，約800人が集まった。M. I. T. における講演会では，500席の会場に1,200人以上が押しかけた。『海辺のカフカ』は特に人気で，全米でも売り上げのトップ・テンに入る。日本で評判のよい『ノルウェーの森』の売り上げは，それ程でもないという。

海外での評判に大きく影響するのは，翻訳の良さである。アメリカで好評だということは，恐らく翻訳も優れているのであろう。

村上春樹が，欧米で受け入れられていることについては，登場人物が西洋人と同じような感性を持ち，同じような生活をしているから，その分西洋人にとって抵抗がないのだとか，それだけ日本文学も，世界で通用する感覚を身につけるようになったのだとか，さまざまな見方が行われている。いずれにせよ，従来の日本的なものを主張する作家ではない。

講談社インターナショナル LTD. は，海外向けの出版物を手掛ける。美術，建築，工芸，デザイン，料理，語学，文芸，武道，健康，ビジネス，社会科学，ガイドブックその他，さまざまなものを出版している。吉川英治の“MUSASHI”（『宮本武蔵』）は，Charles S. Terry 氏による翻訳で，エドウィン・O・ライシャワーの序文が付されて1981年に出版されたものであるが，アメリカで10万部以上売れたという。黒澤明の映画などによる影響もあるにせよ，このようなきわめて日本的とも思える，剣を通じての精神修養の物語が，世界的に評価される普遍性をもっているのであろう。

講談社インターナショナル LTD. の関連会社に，アメリカ，カナダで同社などの本を販売する講談社アメリカ INC. がある。売れ筋の一つは，William Scott Wilson の“THE LONE SAMURAI: The Life of Miyamoto Musashi”（2004）で，これは武蔵の生涯を辿りつつ，その書・絵・彫刻を紹介し，また小説や映画，芝居などで描かれた武蔵像を解説しながら，その思想を探ったものである。このほか桐野夏生の小説“OUT”（2003），松久信幸の料理本“NOBU: THE COOKBOOK”，永友はる乃の“DRAW YOUR OWN MANGA”などもよく出ているという。

紀伊国屋書店が，アメリカ各地に多くの店舗を展開している。

サンフランシスコのジャパン・タウンの店舗は，1969年にオープンした海外進出1号店である。初期は翻訳物が売れ筋で，企業の派遣社員たちが主な購買層であったが，今は顧客の90%がエイジ・アメリカンだという。広い店舗のおよそ3分の1くらいが，Jポップ，アニメ，マンガである。

ニューヨーク店の店長はアメリカ人である。アメリカでは，1980年代には日本を勉強しなければ，という意識があった。90年代には日本だからという意識に変った。今は日

本をそれ程意識することなく，日本がごく自然に入っている。ここも広い店舗の 3 分の 1 位がアニメやマンガである。“Yaoi”“少女漫画 NANA”“Yu-Gi-Oh!”などが人気の売れ筋だという。アメリカの子供たちが，自分の小遣いで買っていくのである。こうしたものと共に，岩波文庫を始めとする文庫本が揃っている。

ニューヨークには，他に旭屋書店，三省堂，中古本を扱う Book Off などもある。

8　伝統文化

茶道・日本庭園

茶道の分野では，殊に裏千家が国際的な普及に力を入れている。海外 33 か国，97 か所に拠点を持っている。海外の登録会員は 5,000 ～ 10,000 人。それ以外に未登録で稽古をしている者が 2 ～ 3 万人いる。

裏千家には，1962 年に創設された裏千家学園という茶道専門学校があり，卒業生は 1,500 人以上いる。その別科外国人研修コースを「みどり会」と呼び，現在 9 か国の留学生 14 名が在籍している。今までにのべ数百人を育てて，外国に返している。

サンフランシスコで茶道を教えるクリスティー・バートレット（Chisty Bartlett）氏もみどり会出身者（15 期生）である。京都で 9 年間修行した。茶室は約二十数年前に作られ，木材はアメリカ産，畳や壁は日本産である。月 1 回の稽古日に通う生徒が 62 人，毎週の稽古日に通う生徒が 60 人，重複者を除くと約 100 人の生徒がいる。そのうち日系人が 60 ～ 65 人，他は外国人である。入会するには，1 年以上待たなければならない。2005 年 12 月に稽古の陪席を許された折には，和服をきちんと着た氏が，中国人，韓国人，日系人，黒人なども含めた国際色豊かな生徒達を，美しい日本語で，厳しく指導している姿が印象的であった。

サンフランシスコには，裏千家サンフランシスコ協会という組織があり，多数の茶道教授者と生徒がいる。またここには表千家の支部もある。

サンフランシスコ市の北西部に，幅 800 メートル，長さ 5 キロの広大な公園，ゴールデンゲート・パークがあり，この中に日本庭園（Japanese Tea Garden）も作られている。

ロサンゼルスにも，裏千家の協会がある。1951 年に千宗室前裏千家家元が，サンフランシスコで行われた日米講和会議に参列，日本美術展で茶道を紹介した。それを機に設立されたもので，松本宗静名誉師範の尽力により，全米一の茶道人口を擁する拠点になっ

た。自宅に「松和軒」という茶室を作り，多数の生徒を指導，80歳を超える現在もなお矍鑠として指導に当たっている。2004年には，松本氏の茶道教授55周年を祝う祝賀茶会が，家元を迎えて行われている。現在ロサンゼルス地区の茶道教授者は約30名，会員は約250～260名である。

ロサンゼルスは，表千家にとっても大きな拠点で，北カリフォルニア・南カリフォルニア支部は，2004年に創立35周年を迎えた。教授者29名，会員は約250名だが，その多くは日本人で，アメリカ人の会員は10～15人だという。

ワシントンD. C.に裏千家の出張所がある。また，ワシントンの日本大使館には2つの茶室がある。1つは「一白亭」と呼ばれる茶室である。もう一つは，大使公邸の茶室で，2005年には裏千家の大宗匠を迎えて，アメリカ大統領夫人らを招き，茶会を行った。

フィラデルフィアに，「松風荘」という書院造り建築と庭園がある。吉村順三の設計で作られ，日米文化交流事業の一環として，1954年に日本からニューヨークの近代美術館に寄贈され，1958年にフィラデルフィアに移築されたものである。現在の所有者は，フィラデルフィア市となっている。敷地面積約500坪，建坪約75坪，建物は書院造り建築と茶室および民家からなる総檜造り，檜皮葺きの木造建築である。書院造りは，三井寺光浄院客殿に着想を得たという。1976年，アメリカ建国200年に当る年には，日本側の資金で大修復工事が行われた。建築当時の襖絵が破損したため，2006年にニューヨーク在住の日本画家，千住博氏が新作の依頼を受け，20面の襖絵を完成させた。茶室は2室作られている。年間1万人以上の見学者が訪れる。

ニューヨークに裏千家の出張所がある。マンハッタンにあるビルの中に，立派な茶室が作られている。教授者が4人，うち1人はアメリカ人で，定期的に稽古に通ってくる者が60～70人おり，日本人とアメリカ人の割合は，3：7でアメリカ人の方が多い。

所長の山田尚氏は在米40年，コロンビア大，プリンストン大，コーネル大，イェール大などで講演したり，国連本部でデモンストレーションをしたりする。アメリカの小・中・高校生がよく見学に来るという。

表千家は，今までニューヨークに正式の組織がなかったが，小池康夫・宗雅夫妻の尽力で，2005年に初めて本部主催の行事を行い，組織づくりを始めた。教授者3人，うち専任は1人，生徒は30～40人，今までに延べ400人を教えた。

ボストンにも裏千家の組織があり，3人の教授者が教える。1人は裏千家学園，2人はみどり会の出身で，みどり会出身者のうちの1人は，アメリカ人である。

イリノイ大学には本格的な茶室があり，芸術学部教授で日本館館長の郡司紀美子氏が裏

千家茶道を指導している。イリノイ大学では，「茶道と禅の美学」「日本文化論」「生け花を通しての日本のデザイン」などの講義を担当，アメリカ池坊いけばな会会長も兼務する。

シカゴでは，裏千家が年に2回，デモンストレーションを行っている。

シカゴから比較的近い，アメリカ中央部にあるセントルイスには，北米最大の庭園があり，ここで日本祭りが30年以上行われている。祭りには，3日間で4万人の人出がある。長野県諏訪市と姉妹都市関係があり，同市が「長野庵」という茶室を寄贈している。

ハワイのホノルルに，日本文化センターがある。この4階が「星光庵」と名付けられた茶室フロアーになっており，大小2室の茶室がある。裏千家，表千家，江戸千家が使っている。

ハワイ大学イースト・ウェストセンターにも，1972年に裏千家が寄贈した茶室「寂庵」と庭園「清苑」がある。またハワイ大学に茶道部があって，2004年には創部35年を祝う行事が行われた。ハワイ大学のウィリアム・ウェイン・フェリス（William Wayne Farris）教授は，千チェアー（千宗室著名教授職）である。

華道

サンフランシスコのジャパンタウンに，「池坊いけばなアメリカ協会」の本部がある。アメリカにおける生け花人口は，カナダを含めると約4,500人で，最初は1世が日本人に教えていたが，今は日本人とアメリカ人がほぼ半数ずつだという。池坊の支部はアメリカに40余りあり，アメリカ人の師範も増えている。支部単位で年に1回展示会を催す。「イケバナ」も英語になった。イリノイ大学の郡司紀美子教授は，池坊の生け花も指導する。

草月流は，アメリカに45支部ある。師範は約700人，アメリカ人が多い。ただし，カリフォルニア地区は師範，生徒共に日本人が多い。草月流は自由なところが，アメリカ人の気質に合っているのか，アメリカ人の中によく浸透している。

「いけばなインターナショナル」という組織がある。1956年に「花を通じての友好」をモットーにアメリカ人，エレン・ゴードン・アレン（Ellen Gordon Allen）により設立されたもので，現在56か国，約8,500人の会員をもつ。うちアメリカの会員が2,500人を占める。池坊，小原流，草月流など，生け花の諸流派をいわば統合する組織で，2006年の10月には，世界各国から諸流派の1,000人の人々が東京プリンスホテルに集まり，創立50周年のいけばなインターナショナル世界大会が開かれた。

舞台芸術

能・狂言・歌舞伎などの伝統的舞台芸術の公演も，折々に行われる。ただ，こうした公演の本格的舞台には，膨大な費用がかかる。そう度々行われるわけではない。

比較的新しいところでは，2005 年 6 月に松竹大歌舞伎近松座，鴈治郎（当時）の公演が，シアトル・バークレイ・ロサンゼルスで行われた。2004 年の 7 月には平成中村座，勘九郎（当時）・扇雀・橋之助らの公演が，ボストン・ワシントン D. C.・ニューヨークで行われている。

アメリカ人は，イヤホーンで同時通訳された英語の台詞を聞きながら舞台を鑑賞するのである。しかし，これで充分に理解出来るようで，ロサンゼルスにおける鴈治郎の公演では，4 日間で約 4,000 人の来場者があった。初日は座席の料金が高く，一番安い席でも＄100 以上，2 日目以降で＄65 位だから安くはない。老人の身で若い役をこなすことに，感嘆の声が上ったという。公演に先立って，歌舞伎についての解説の催しが行われるが，説明がやや初歩的に過ぎる，という不満も聞いた。カリフォルニアは日系人も多いだけに，レベルの高い観客も多いのであろう。サンフランシスコには，今までに歌舞伎が 3 回，狂言が 2 回来たが，それぞれ満席であったという。

狂言の場合は，舞台の上部に，スーパータイトルと呼ぶ英語の字幕が写し出される。これを見ながら，舞台を鑑賞するのである。2005 年 5 月にサンフランシスコの Asian Art Museum で行われた野村萬斎一座の公演では，広い観客席をほぼ一杯に埋めたアメリカ人の観客から，しばしばどっと笑い声が上った。終った時には観客の半分位が立ち上がって，熱烈な拍手を送っていた。スーパータイトルで，アメリカ人にも充分に理解出来るのである。

こうした観客の中に，およそ 1 割程度の日本人がいる。もともとのファンもいるが，多くはたまたま日本から歌舞伎や能や狂言が来たから行ってみようか，と出かけてきた人々である。日本にいた時には，一度も見たことがなかったけれども，初めてこうした古典芸能に接して，祖国が持っていたものは，こんなに素晴らしいものだったのかと改めて感嘆する。こうした話をしばしばアメリカで耳にするのである。そうであるとすると，海外における古典芸能の公演は，海外にいる日本人をいわば再教育する効用も持つことになる。こうした古典芸能の海外公演は，多大な費用を要するだけに，簡単には実施出来ない点があるが，単に日本文化を外国に紹介することにとどまらず，こうした思わぬ意義を持つことにも留意すべきであろう。

9　現代文化

アニメ・マンガ

アメリカで，若い人々が日本に関心を向けるきっかけとなるのは，圧倒的にアニメとマンガである。これはアメリカばかりでなく，ヨーロッパや中国でも同じで，世界的な現象といってよい。アメリカに進出している日系の書店で，最大の売り場面積を占め，売り上げに貢献しているのが，アニメとマンガなのである。

大学における日本学の講義も，まずマンガから入る，という話もよく耳にする。

サンフランシスコに「ビズ・メディア」（VIZ Media）という会社がある。これは現会長の堀淵清治氏が，アメリカでマンガを出版するために，まず 1986 年に小学館から 100％の出資を受けて「ビズ・コミュニケーションズ」（Viz Communications, Inc）を設立した。2003 年に小学館と集英社の合同出資を受け「ビズ」（Viz, LLC）となり，2005 年には「小プロエンタテイメント」と合併して現在の会社になったものである。20 年前の市場規模ゼロから，2005 年にはアメリカ・カナダにおける日本マンガの売上げを，約 1 億 7,500 万ドル（約 210 億円）にまで急成長させた，その原動力となった会社である。ちなみに北米における日本アニメの DVD の売上額が約 2 億 5,000 万ドル（約 300 億円）だというから，それに近づきつつある。社員も 4 人から 140 人以上にまでなっている。

2002 年秋に集英社のマンガ雑誌「週刊少年ジャンプ」の英語版月刊誌「SHONEN JUMP」を創刊，創刊号が 50 万部，現在も 20 万部のペースで売れている。2005 年には月刊少女マンガ雑誌「SHOJO BEAT」（少女ビート）を創刊し，こちらも売行きは順調である。

国に対しては，著作権の問題をしっかりやってもらいたいと注文する。現在は野放し状態で，アメリカも海賊版王国だという。

氏は，サンフランシスコのジャパンタウンに，J ポップセンターを作る構想を持っている。1 階に紀伊国屋書店が入り，一般の書籍だけではなく，DVD ・マンガ・アニメなども売る。さらに日本映画を専門に上映する映画館を併設する。アメリカ人が入る店にしたいと意気込む。

ニューヨークの「ヴァーティカル社」も，小説と比較しても引けを取らないようなマンガを出すという方針で，最近手塚治虫『ブッダ』の英訳本，“BUDDHA”シリーズを出し始めた。印刷を逆版にした，左開きの仕様である。マンガ界におけるアカデミー賞といわ

れるアイズナー賞を2年連続で受賞した。

それにしても，どうしてアニメやマンガが日本のものでなければならないのか。もちろん日本が良質のアニメやマンガを生んでいることによるのであるが，それは，平安朝以来の鳥獣戯画や絵巻物，また奈良絵本，江戸時代の絵入り物語などの，ストーリー性をもった絵画の伝統の中から生み出されてきたものだからであろう。こうした見方に対して，明治以降の近代化で，それまで融合していた文と絵は文学と絵画に純粋化され，その一方で欧米から輸入されたカリカチュアの影響を受けて生まれたマンガが今日につながっているとする，宮本大人氏のような見方もある（朝日新聞 2006. 12. 22 夕刊「学のいま：夜明け前のマンガ学」）。しかしそうであれば，アニメやマンガが，外国のものではなく，なぜ日本のものでなければならないかについての説明が，別に必要になるであろう。

和太鼓

アメリカにおける和太鼓の歴史は，サンフランシスコ太鼓道場の田中誠一氏の歩みと共にある。田中氏は 1967 年に渡米，68 年に和太鼓同好会を結成して活動を開始する。75 年にサンフランシスコ太鼓道場を創設する。日本に何度も帰り，長野の御諏訪太鼓，能登の御陣乗太鼓，東京の助六太鼓など，日本各地の有名な太鼓の師匠のもとで修行し，技術を磨いた。いま，全米で 150 組，北米全体では 200 組近くの太鼓演奏者がいるが，そこで活躍する人のほとんどが，田中氏の門下生である。

アメリカでは，東西両海岸沿いと大学など，教育が進んでいるところに良く普及しており，一般的に言えば，中央部はあまり盛んではない。

サンフランシスコ太鼓道場の会員は，200 名を超える。田中氏は，その中の精鋭 15 人を集めた「ドリーム・チーム」を率いて，全米各地を回り，演奏会を行う。アメリカで伝統芸能・民俗芸能などの分野で，顕著な功績を上げた者に贈られるナショナル・ヘリテッジ・フェローシップを，2001 年に日本人として初めて受賞している。アメリカ版人間国宝とも言える権威ある賞である。

ハワイには，ケニー遠藤氏がいる。ロサンゼルス生まれの日系 2 世で，カリフォルニア大学ロサンゼルス校では，民族音楽を専攻した。サンフランシスコ太鼓道場で，和太鼓の演奏を聞き，その衝撃が人生の方向を決めた。和太鼓道場に入門して稽古を始める。1980 年から 90 年にかけて，日本各地を歩き，太鼓の修行をする。

いま，組太鼓だけでなく，横笛・能笛・津軽三味線・ドラムなどの演奏者と共演し，ジャンルを超えた幅広い音楽活動を行っている。

先述した如く，スタンフォード大学では，ステファン・M・サノ教授が，太鼓の歴史を講じている。また，ケニー遠藤氏もハワイのタイコセンター・オブ・パシフィックという短大で，週3回太鼓のクラスを持っている。

食文化

アメリカ人には肥満が多い。そうした肉を中心とする食生活に対する反省からであろうか，近年ヘルシーな日本食に対する人気は根強いものがある。中でも，寿司は広く一般に普及してきている。十数年前までは生の魚を食べることに対する抵抗もあったというが，今それはほとんどない。一般のアメリカ人が買い物するスーパーマーケットで，寿司のパックが100以上も並べられていたりする。アメリカでは，カリフォルニアロールと呼ばれる，蟹・キュウリ・アボガドなどを，上に薄く御飯を載せた海苔で巻き込んだものがよく食されている。食は外国に渡れば，その国の人々の舌に合ったものに変質していくのは，ごく自然なことである。

アメリカには，しばしば韓国人やベトナム人などが経営する寿司店がある。もちろん誰が経営してもいっこうに差し支えないのであるが，問題はきちんとした味が伝わっているかどうかということである。きちんとした味を踏まえた上で，アメリカ人の好みに合わせて変質したというならよいが，日本料理は人気があるから，経営的にうまみがありそうだという理由で商売を始め，見よう見まねでおかしな味のものが売られ，日本料理の評判を落とすということがあっては残念である。寿司と照り焼きが同じ店で供されるということも珍しくない国柄であってみれば，その心配も必ずしも杞憂とは言えない。

時々日本から腕のよい板前が行って，現地で講習会を開くということがあってもよいのではなかろうか。サンフランシスコの日本料理のシェフが経営する料理学校で，日本料理の講習会を開いた時には，500人以上も集まったということである。寿司店経営者の側にも，そうした機会を待望するものがあるかもしれない。

また，講習を受けたものに対して認定証を発行したり，フランス料理の星制度に倣ったランクづけをするとか，さまざまな工夫の余地はありそうである。

日本人が比較的多い西海岸などは特にそうであるが，一般のスーパーで，醤油・酒・豆腐・しいたけ・魚の缶詰・インスタントラーメンなどがよく見受けられ，日本食品の浸透ぶりを窺うことが出来る。

10　アメリカ各地の日本文化

サンフランシスコ

桑港学園はサンフランシスコ仏教会（Buddhist Church of San Francisco）の付属日本語学校である。約 330 人の生徒が学んでいる。

北米毎日新聞の乗元恵三氏は元社長で現顧問。野本一平のペンネームで執筆活動もする。日本文化は，思い切ってもっと黒人社会に入っていくべきだと説く。

岡田幹夫氏は，日米タイムズ社長。日米タイムズは英語と日本語の両建で，公称 8,000 部発行，朝日新聞系である。カラオケ（アメリカでは，キャラオキと発音される）もあちらこちらにあるが，日本のものという意識は薄れつつあるという。

ライザ・ダルビー（Liza Dalby）氏は，作家・文化人類学者・日本文化研究家。スタンフォード大学より博士号を取得。日本での芸者体験を持つ。著書に『紫式部物語：その恋と生涯上（下）』（岡田好惠訳，光文社，2000. 11）などがある。.

土井由理子氏は，早大卒。「シアター・オブ・幽玄」（Theatre of Yugen & Noh Space）を主宰し，サンフランシスコに自前の劇場を持って，古典芸能と現代劇の公演や舞台に意欲的に取り組んでいる。

ロサンゼルス

リトル・トーキョーに，日米文化会館がある。日本庭園もある。ここでさまざまな催しが行われる。竹細工展，浮世絵作家展，益子焼展，漆塗り展，沖縄のテキスタイル展など。中でも，益子焼，信楽焼などの陶芸展，民芸の展覧会などに人気がある。ビジュアルアーツ・ディレクター，キュレーターは，小阪博一氏。ロサンゼルスの人々は，目が肥えているからと，斬新な企画を心掛ける。展示会を 1 回すると，約 3,000 人の入場者がある。

リトル・トーキョーに隣接して，全米日系人博物館がある。日系移民が始まって以来，100 年以上にわたる日系人苦闘の歴史を，パネルや写真で展示する。日系人収容所のバラックの一部も移築されている。この施設は，ソニーの盛田昭夫氏が 950 万ドルを提供したのを始め，多くの人々の寄付金 2,300 万ドルで出来た。

「羅府新報」という新聞がある。1903 年の創刊で，初めは日本語であったが，1926 年より日本語と英語になった。1984 年には 24,000 部であったが，今は 15,000 部を発行する。長島幸和氏が編集長である。

“Cultural News”は，東繁春氏がロサンゼルスで発行する，英文の文化情報紙である。

アメリカに，日本の美術や文化を主体としたテレビのジャポニズム・チャンネルを作れないか。日本文化が商売になるという感覚が，NHKにはあまり無いのではないか，と語る。

ニューヨーク

1907年にニューヨークに設立された「ジャパン・ソサエティー」は，2007年でちょうど創立100年を迎える。日米間の相互理解と友好関係を深め，日本の思想，芸術，科学，産業，経済環境に対する米国人の理解を促進することを目的として活動する，アメリカの民間非営利団体である。80億の基金の運用益や個人と法人の会員の年会費，個人・企業・個人財団・企業財団からの寄付金などで運用されており，行政からのサポートはない。

日米各界より著名人を招いて講演会やパネル討論会を催したり，米国における指導者層に，日本に対して理解のある人材を増やすことを目的に，人物交流活動をしたり，また展覧会・映画・講演会を開催したりと，多彩な活動を行っている。

2005年には，村上隆のキュレーションによる展覧会「リトルボーイ：爆発する日本のサブカルチャー・アート」を開き，好評であった。さらにこの展覧会にちなみ，ジャパン・ソサエティーの文化・芸術事業のテーマを「Cool Japan: おたく時代到来！」と銘打ち，「おたく文化」といわれる現象の意義および影響を，舞台公演，公演，シンポジウム，映画などの企画を通じて多角的に検証している。塩谷陽子氏は舞台公演部長で，『ニューヨーク：芸術家と共存する街』（丸善ライブラリー，1998）の著書がある。

学校教育にも力を入れている。2005年に教員の日本に対する理解向上を計るため，日本の現代史，文学，文化・言語，映画について総合的に学ぶ30時間の教育者向けのセミナーを開いた。また教員日本派遣プログラムでは，ニューヨークの近郊の中学・高校から厳選した教員12名を日本に派遣，3週間の日程で研修した。また，生徒を対象としたさまざまな教育プログラムも実施している。源和子氏は，そうした仕事を担当する教育プログラム副部長である。

1972年に設けられたトヨタ語学センターでは，12のレベルに分れた，きめ細かい日本語講座を行っている。また3レベルの書道講座を設置している。

C. V. スター図書館は，日本の美術，歴史，文化，社会，政治，経済，宗教などに関する，主に英文で書かれた書籍，約14,000冊を所蔵する。

ボストン

ボストン日本協会は，1904 年に日米の相互理解を深めるために設立され，2004 年に創立 100 年を迎えた。日本の伝統文化および現代芸術を，講演や映画，舞台，展示会などを通じて紹介したり，政治・経済・教育問題などさまざまな分野の講演会やセミナーを実施する活動をしている。会員数約 1,000 人，ピーター・グリーリ氏が理事長を務める。

ピーター・グリーリ氏は，幼少年時代を日本で過ごし，ハーバード大学で文学を学んだ。早大，東大へ留学。のちコロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センター所長となる。大学での日本学教育と並んで，小中高校段階で日本について教育することも大きな意義を持つとして，その立場から，ジェットによる文化交流が果たした役割について高く評価する。当初の予想を超えた大きな効果があったという。また戦後の貧しい時代には，日本人には自信があったが，今それが失われてしまった。日本文化のコクが薄まったように感じられて，それがつらいという。日本の文化に深い愛情を持った人の言葉である。先年日本政府より，勲三等瑞宝章が授与された。

結　語

アメリカをはじめ，世界各地を歩いて感じることは，日本の文化が，世界に通用する普遍的な価値を持っているということである。日本を知る，実に多くの方々が，日本の文化に愛着や愛情を持ち，敬意を払って下さる姿に接するにつけ，そのことを改めて強く確信する。世界各地の文化はもちろんそれぞれに素晴しいが，日本の文化もそれらに劣らず，独自の優れた価値を持っているのである。

日本の文化に関心を持ち，それを仕事としている人は，大学や研究機関に所属する研究者だけでも，世界全体では数千人，アメリカでも千人以上に上る。日本語の学習者は，国際交流基金の調査によると，2003 年度現在，世界全体では 235 万人おり，今後もさらに増える見通しである。

ただ，心配な点もある。経済が長期の不調にある中，今世界の人々，特に若い世代が日本に関心を向けるきっかけとなっているのは，圧倒的にアニメとマンガだという事実である。これは，アメリカでも，ヨーロッパでも，中国でも世界中すべて同じである。アニメやマンガが，日本の本格的な文化に関心を向けるきっかけになり，入り口になってくれれば，誠に結構なことである。今は，アニメやマンガが，日本のものとして捉えられている。しかし，いずれはこのイメージの結びつきが，希薄になる時が来るかもしれない。その時，

今まで日本に向けられていた関心がどう変るのか。このことを我々は今からよく考えておく必要があろう。

もし日本が，さらに多くの人々に日本のすぐれた文化を知る機会を提供し得るならば，世界の人々は，それだけより豊かな精神的な世界を享受し得ることになるに違いない。

ジャパンファンデーションの年間予算は，いま約 172 億円である。ひと頃よりだいぶ増えたといっても，まだまだ少ない。仮にこれが 2 倍になるだけでも，随分たくさんのことが出来る。

アメリカで日本に対する理解が深いのは，主として東海岸と西海岸地方である。いずれも教育程度の高い地域である。すなわち，日本に対する理解は，教育機関を通じて深まると言ってよいのである。そうであるとすれば，教育機関に対する援助は，日本に対する理解を深める上で，きわめて有効な方法であり，手段だと言ってよい。

さし当り日本への入り口は，日本語教育である。日本語担当教員の量と質の確保は，きわめて重要な問題である。もともと海外には，さまざまな学問を学ぶために留学し，現地で配偶者を得るなどしてとどまり，職業としては日本語教師を選ぶことになったというケースが多い。近年アメリカでは，研修制度もかなり整ってきたが，このような方々を随時日本に招いて講習を受けてもらったり，日本から日本語教育の専門家を派遣して研修会を開くということはやはり必要であろう。さいたま市の国際交流基金日本語国際センターなどである程度行われているが，さらに充実する必要がある。

中国政府は，国家プロジェクトとして「孔子学院」を各国に作り，中国語教育を熱心に進めている。すでに日本を含め 51 の国や地域に 120 校以上作ったという。中国側が講師を派遣し，教材を提供するのである。アメリカでは，中国経済が好況であることにより，中国語履修者が急増しているが，その上に中国政府のこうした努力が加わる。韓国政府も特にアメリカで，韓国語教育・韓国学の助成に力を入れている。日本も何もせずに手を拱いていれば，こうした国々に大きく遅れを取ることになる。

研究者の養成も大切である。比喩的に言えば，1 人の研究者は生涯に 100 人の後継者を育てる。大学院時代の奨学金の提供や日本留学の際の助成は，効果が大きい。

大学段階もさることながら，小中高校段階での日本語教育の効果は，さらに大きい。この段階では，アメリカ人が日本語教育を担当することが多いから，こうした教員を日本に招いて研修したり，時には生徒を日本に招くことがあってもよいかもしれない。また 60 歳代の中高年定年退職者で，日本語能力の確かな者をアメリカに派遣し，半ばボランティアで日本語教育に当ってもらうのも，一つの方法であろう。

いずれにせよ，もう少し予算があれば，やるべきことはいくらでもある。民間で文化方面に助成をしている団体も少なくない。国家予算と民間団体の資金を集めてファンドを作り，一方で有識者による審議会を作り，英知を結集して有効な使途を検討する仕組みが作れないものであろうか。

これからの日本は，再び経済大国を目指すということは，現実的ではないし，軍事大国を目指すというのはとんでもないことである。軍事の増強は，周辺諸国を刺激し，際限のない軍拡競争に陥る。それよりも日本の文化を世界に知ってもらい，日本に対して愛情や愛着，また理解を持ってくれる人々を増やす努力をする方が，遥かに賢明であるといえる。そのような人々は，けして日本を攻撃しようとはしないであろう。長い目で見れば，日本はそれだけ安全になる。戦闘機を増やすよりも，遥かに効果があるのである。そのような意味では，国が文化を最重視する政策をとることを，国家戦略という強い言葉で表現してもよい。

ドナルド・キーン氏は，日本はアジアのフランスになるべきだと言われる。フランスは，文化に多くの予算を使い，文化を最も大切にしている国である。そしてまさにそのことによって，世界中から信頼と尊敬を勝ち得ている。日本もそれを倣うのが最も賢明な選択と言うべきであろう。日本を今後に活かす道はそこにしかないと考える。これからの日本は「文化大国」を目指すべきである。

次の方々には，一方ならぬお世話になった。厚く御礼申し上げる。（敬称略・順不同）

アンドルー・バッシャイ（Andrew E. Barshay, UC バークレイ），マック・ホートン（H. Mack Horton, UC バークレイ），アラン・タンスマン（Alan Tansman, UC バークレイ），スーザン・マティソフ（Susan Matisoff, UC バークレイ），羽生淳子（UC バークレイ），スティーブン・ヴォーゲル（Steven K. Vogel, UC バークレイ），長谷川葉子（UC バークレイ），Miwako Tomizuka（UC バークレイ），Chika Shibahara（UC バークレイ），Noriko Komatsu-Wallace（UC バークレイ），石松久幸（UC バークレイ），Keiko Hjersman（UC バークレイ），ヨーコ・ウッドソン（Yoko Woodson, サンフランシスコ・アジア美術館），川名洋介（在サンフランシスコ総領事館），高橋久子（在サンフランシスコ総領事館），堀淵清治（VIZ Media, LLC），田中誠一（サンフランシスコ太鼓道場），館寺規弘（桑港寺），我孫子洋（Buddhist Churches of America），ルメー大岳（Daigaku Rummé, 曹洞宗国際センター），サック・牧・ミサ子（モリソン・フォースター LLP），ライザ・ダルビー（Liza Dalby, 作家・文化人類学者），Noriko Nagata（サンフランシスコ大），Kyoko Suda（サンフランシスコ大），Stephen Roddy（サンフランシスコ大），土井由理子（Theatre of Yugen & Noh Space），岡田幹夫（日米タイムズ），乗元恵三（北米毎日新聞社），Teruko K. Anderson（Ikenobo Ikebana Society of America），清野眞一（サンフランシスコ紀伊国屋），藤枝照真（サンノゼ紀伊国屋），クリスティー・バートレット（Chisty Bartlett, 裏千家），小原静爾（裏千家・書道家），小原宗香（裏千家），ピーター・デュース

（Peter Duus, スタンフォード大），別府春海（スタンフォード大），スティーブン・カーター（Steven D. Carter, スタンフォード大），ステファン・サノ（Stephen M. Sano, スタンフォード大），ニーブリッグ公江（Kimie N. Nebrig, スタンフォード大），小竹直美（スタンフォード大），疋田由紀江（パロアルト・ハイスクール），ヘルベルト・プルチョウ（Herbert Plutschow, UCLA・城西国際大学）ミヒャエル・マルラ（Michael F. Marra, UCLA），ドナルド・マッカラム（Donald F. McCallum, UCLA），オームス・ヘルマン（Herman Ooms, UCLA），マリコ・タマノイ（Mariko Tamanoi, UCLA），マルラ俊江（Toshie Marra, UCLA），Mariko Kitamura Bird（UCLA），トーマス・ライマー（J. Thomas Rimer, ピッツバーグ大），シャロン・サダコ・タケダ（Sharon Sadako Takeda, ロサンゼルスカウンティ美術館），ホリス・グダル（Hollis Goodall, ロサンゼルスカウンティ美術館），Rika Iezumi Hiro（ロサンゼルスカウンティ美術館），ジョーン・ピジョー（Joan R. Piggott, 南カリフォルニア大），マサコ・タマナハ（Masako Tamanaha，南カリフォルニア大），Fujiko Terayama（南カリフォルニア大），Grace A. Shiba（南カリフォルニア大），鎌田康彦（在ロサンゼルス総領事館），諏佐由有子（ロサンゼルス国際交流基金），西田佳愛（ロサンゼルス国際交流基金），渡邊眞紀（ロサンゼルス国際交流基金），秋葉玄吾（ロサンゼルス曹洞宗），石原正法（ロサンゼルス浄土宗），伊東憲昭（ロサンゼルス真宗大谷派），小谷覚龍（ロサンゼルス真宗本願寺派），宮田諦詮（ロサンゼルス真言宗），東繁春（Cultural News），長島幸和（羅府新報），小阪博一（ロサンゼルス日米文化会館），松本宗静（ロサンゼルス裏千家），池井宗之（ロサンゼルス裏千家），鮫島等（全米日系人博物館），浜野祥子（ジョージ・ワシントン大），Hideki F. Rose（ジョージ・ワシントン大），太田米司（米国議会図書館），Eiichi Ito（米国議会図書館），吉村玲子（フリーア美術館，アーサー・M・サックラー美術館），ルイーズ・A・コート（Louise A. Cort, アーサー・M・サックラー美術館），大山勝之（在米国日本大使館），篠原弘明（在米国日本大使館），メリー・杉山（ワシントン草月流），キャメロン・ハースト（G. Cameron Hurst III, ペンシルヴァニア大），フランク・チャンス（Frank L. Chance, ペンシルヴァニア大），リンダ・チャンス（Linda H. Chance, ペンシルヴァニア大），ウイリアム・ラフルーア（William R. LaFleur, ペンシルヴァニア大），シェリー木村博子（ペンシルヴァニア大），Ayako Kano（ペンシルヴァニア大），ダヴィド・ハウエル（David L. Howell, プリンストン大），マルティン・コルカット（Martin C. Collcutt, プリンストン大），牧野成一（プリンストン大），牧野泰子（プリンストン大），Keiko Kuriyama（プリンストン大），Tomoko Shibata（プリンストン大），ドナルド・キーン（Donald Keene, コロンビア大），バーバラ・ルーシュ（Barbara Ruch, コロンビア大），グレゴリー・フルーグフェルダー（Gregory M. Pflugfelder, コロンビア大），ハルオ・シラネ（コロンビア大），鈴木登美（コロンビア大），フミコ・ナジキアン（Humiko Nazikian, コロンビア大），デヴィッド・ルーリー（David Lurie, コロンビア大），ロバート・インマーマン（Robert M. Immerman, コロンビア大），マックス・ムアマン（D. Max Moerman, コロンビア大バーナード校），ヴィーブケ・デーネーケ（Wiebke Denecke, 魏樸和，コロンビア大バーナード校），アミー・ヘンリック（Amy V. Heinrich, コロンビア大），野口幸生（コロンビア大），ウォルシュ美穂（コロンビア大），青木健（コロンビア大），奥山爾朗（在ニューヨーク総領事館），高嶋久志（在ニューヨーク総領事館），洲崎勝（ジャパンファンデーション），正野圭治（ジャパンファンデーション），Sumie Ota（ニューヨーク・パブリックライブラリー），塩谷陽子（ジャパンソサエティー），源和子（ジャパンソサエティー），ダウン・ローソン（Dawn Lawson, ニューヨーク大），松島綾（ニューヨーク大），渡辺雅子（メトロポリタン美術館），土肥信一（メトロポリタン美術館），山田尚（ニューヨーク裏千家），小池宗雅（ニュ

ーヨーク表千家），小池康夫（ニューヨーク表千家），嶋野榮道（ニューヨーク大菩薩禅堂），中垣顕實（New York Buddist Church），佐藤紘彰（翻訳家），酒井弘樹（Vertical），ジョン・フラー（John R. Huller, ニューヨーク紀伊国屋書店），墨とも江（講談社アメリカ），前田直子（講談社アメリカ），ジョン・トリート（John W. Treat, イェール大），広江浩一（イェール大），丸山美子（イェール大），濱田宏一（イェール大），エレン・ハモンド（Ellen H. Hammond, イェール大），中村治子（イェール大），エドウイン・クランストン（Edwin A. Cranston，ハーバード大），阿部龍一（ハーバード大），入江昭（ハーバード大），ウエスリー・ヤコブセン（Wesley M. Jacobsen, ハーバード大），ヘレン・ハーデーカー（Helen Hardacre, ハーバード大），テッド・Ｊ・ギルマン（Theodore J. Gilman, ハーバード大），マクヴェイ・山田久仁子（Kuniko Yamada McVey, ハーバード大），坂口和子（ハーバード大），ピーター・グリーリ（Peter M. Grilli, ボストン日本協会）, Yuzo Sekikawa（在ボストン総領事館），ジョウ・アール（Joe Earle, ボストン美術館），セーラ・Ｅ・トンプソン（Sarah E. Thompson, ボストン美術館），新宮育枝（マサチューセッツ工科大学），エスペランザ・クリステンセン（Esperanza Ramirez-Christensen, ミシガン大），殿村ひとみ（ミシガン大），岡まゆみ（ミシガン大），仁木賢司（ミシガン大），深澤ゆり（ミシガン大），マリベス・グレイビル（Maribeth Graybill, ミシガン大），ノーマ・フィールド（Norma Field, シカゴ大），ハンス・トムセン（Hans B. Thomsen, シカゴ大），Hiroyoshi Noto（シカゴ大），奥泉栄三郎（シカゴ大），松尾弘子（在シカゴ総領事館），ジャニス・キャッツ（Janice Katz, シカゴ美術館），アレクサンダー・ヴォヴィン（Alexander Vovin, ハワイ大），聖田京子（ハワイ大），クック（峯岸）治子（ハワイ大），ジョエル・コーン（Joel R. Cohn, ハワイ大），ジョン・スゾスタク（John D. Szostak, ハワイ大），薩摩みちこ（ハワイ大），バゼル山本登起子（ハワイ大），中村邦子（在ホノルル総領事館），竹村さわ子（ホノルル美術館），与世盛智海（Honpa Honganji Mission of Hawaii），町田時保（ホノルル曹洞宗），天野大地（ホノルル出雲大社），ケニー遠藤（Kenny Endo, 太鼓アーティスト）

福田秀一（国文学研究資料館），伊井春樹（国文学研究資料館），伊藤鉄也（国文学研究資料館），千田稔（国際日本文化研究センター），鈴木貞美（国際日本文化研究センター），今井雅晴（筑波大学），国際日本文化研究センター海外研究交流室，桜井友行（ジャパンファンデーション），小川忠（ジャパンファンデーション），加藤晶（ジャパンファンデーション），栗田淳子（ジャパンファンデーション），藤井玲子（裏千家），北川義隆（表千家），林安明（浄土真宗本願寺派），木曽修（信州大谷派），小林千秋（曹洞宗），川上泰男（紀伊国屋書店），倉持哲夫（講談社インターナショナル），星野恒彦（俳人協会），徳留丈士（文化庁），和田敦彦（信州大学），佐藤花子（いけばなインターナショナル），ショア扶左子（スタンフォード日本センター），古尾谷三重子（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター），福久織江（北海道国際交流センター），並木博（早稲田大学），手塚千鶴子（慶應義塾大学），河野雅昭（慶應義塾大学）

なお本研究は，平成18年度経済学部研究教育資金の助成を受けた。